
いきなりサバイバーっ！

河野夜兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いきなりサバイバーっ！

【Nコード】

N1639J

【作者名】

河野夜兎

【あらすじ】

無人島でサバイバル生活をしたい…。そんな事絶対に輕はずみに思っちゃダメだろーがっ！！俺のバカヤローーっ！！ああ…、無事に生きて帰れるのか？俺よ…（涙）

第一話・俺とバカとアレの最悪の無人島生活がいきなり幕を開けたとさ…

「人生悔いを残さないようにこれだけはやっときたい！って事、ノブヨシ君にはある？」

数日前に、同棲して1年になる彼女のナミエにそう尋ねられた俺は、某バラエティー番組の影響もあってか即座にこう言った。

「そりゃあ、無人島サバイバル生活かなあ。なんか男のロマンって感じだよなあ」

ああ、……あの時あははっ」と脳天気には笑った俺のアホ……。
つか、あの時の俺に告ぐ。マジ100回くらいあの世とこの世を往復しとけ。。。

俺は重苦しいため息を砂の上に落として膝を抱えてうなだれた。

途方に暮れ沈黙の後、顔を上げて細める目で見渡す眼前は、海、海そして海っプラスピンと真っ直な水平線！&後ろはなんか草ばーばーで鬱蒼とした山っばい景色……。

そして、俺の隣にはなんか、枯れ枝みたいに悲壮感漂うオッサンが一匹。

何？この状況ってか……？

長いぞ。話すとすっげえ長いからな！

心して聞いてくれ…。

遭難しました。

はいっ、終わりっ！！

はあ？何？短えくだと……？

もっとしつかり説明しろだ？

はあくん、あっそう……。あれだね……。あんた達相当な捻くれモンのどSだな？そうやって俺に嫌々な事思い出させて、心をエグッて楽しんじゃおうってか？

ま・さ・に・他人の不幸大好き人間だなっ！

そうかい……。ああそうかい……。

そんなに知りたいか。

そして、俺が地の底深くマントル辺りまで沈んで焼失するのを楽しみたいってワケ……。

ガキヨツ……！！

「！！！！……いつで……………っつ！！」

後頭部を鈍器で打ち付けられました！

衝撃からして、きつと棒キレであろう……。

「え、何っ？？俺、原住民に襲われ……」

「さっきから一人でブツブツキモうるさいっ！」

興奮したチンパンジーのような金切り声の女……相原風音が俺の

あいはらかざね

後ろで、何故かイチローの真似して棒キレで素振りしちゃってるよ！

はい、あいつ……。明らかに俺を撲殺しようとしています！

誰か、ヘルプみ。

「意味不明な腐ったボヤキはやめろ。マジ引くから。」

再度俺の頭を棒キレで振り抜いた。あ、すげえ。なんかひよこと星がでた…。

マジわかんねー…、あいつに俺が殴られる意味が全っ然わかんねーよ。

俺はそのまま真横にふらあゝと倒れて意識を失った。

意識を失い夢を見る。

ああ、俺とナミエの愛の巣…。愛しき彼女の笑顔。

…え、ひざ枕？

あははっ、やめろよ、マジで照れるじゃねーか…。

…でも嬉しいなあ。

ナミエの柔らかい膝。

このままキスして、ベッドへ…。

性格も優しいし、料理もうまい。

ああ、でもその前にナミエの作る超上手いカルボナーラが食べた
い。

「腹減った・・・ナミエえ、カルボナーラ食べたいよお・・・」
自分の寝言で目が覚める。

頭に人の温もり。

…ああ、夢じゃなくて本当に膝枕されてたんだ……。
チンパン…じゃない、相原にも優しいところはあるんだな…。

ゆっくりと目を開けた正面にちよつと頬を上気させ照れた笑み・
・即ちはにかんだ才、オッサンかよっつ!!

俺は即座に飛び上がり、オッサンと数メートル距離を置いた。

「……………」

え？何…？そのしゅんと残念そうな伏せ目がちな悲しい笑みは。

「ぶっ!!あゝっはっはっはっはっはっ!!」

チンパンが俺を指さしげらげら爆笑・・・

おのれえ…、チンパン……。お前、眠ったらマジおっぱい揉んで
やつからなあ…、覚えとけやゴラアア!

…声に出して吠えたいところだが我慢する。

命はやっぱり大事にしなきゃいけないからな。

「じゃあ、ちよつとオツムの腐った主人公、佐々木ノブヨシ（二十
九歳オス）の為に私達の身に何が起きたかちよつとおさらい。」

チンパン相原はまるで教師にでもなったかのように、細い棒キレ
を持って砂浜に立つ。

「いやっ！オツム腐ってねーぞコラアア！」

俺の指さしツツコミに、

「黙って聞けよ！ウッスラワカハゲ。」

「うおっーっふ!!」

チンパンが俺の心臓^{ハート}を言葉のナイフで躊躇なくひと突き。

「……てかさうゆう事を、普通に言っちゃえるお前のデリカシーのなさってよー……」

鬼畜だな、マジでよ。

「くすつ……」

オイコラオッサン、何くすつとか笑っちゃってんだよ！

「そこっ！笑うなら遠慮がちじゃなく堂々と高らかに笑えやつ！」

オッサンを指さしながら、あ……、今自分で笑えやとか言ってたくせに俺、めっちゃ傷ついてるぞ。

オッサンはエヘっつと肩を竦めて笑った。全くもって可愛くねーよ。

「気が済んだかね？ワカハゲ君。」

チンパンがいやらしいニヤケ顔で俺を見つめてる。

「……たのむ。話を進めて下さい。」

俺は半ば泣き出しそうな顔で俯いた。

「よろしい。」

勝ち誇ったような笑みで頷くチンパンは、これまでのいきさつを語り出した。

「いいかい？私達は見てのと通りのまんまだが、今遭難してる。」

うん、そこはわかってる。

「とりあえず、今現在の日付と時刻は私の腕時計（衝撃に強い防水タイプ）によると、トリスタ共和国現地時間の十二月二十日、日曜日、午後二時。現在地は勿論わかんないどっかの孤島。」

「十二月二十日?…って事は…」

俺の問い掛けにチンパンは、

「ああ…、トリスタ国立記念空港から小型旅客機が離陸して、海上に墜落してから、丸二日経ってる。」

「…俺、丸二日眠ってたのか……。」

どうりで腹減ってるわけだ。

「この島に流れついたのは残念だけど、お前と私と日陰輝明さんひかげてるあきの三人だけ……。」

チンパンはため息を砂浜にひとつ落とした。

…オッサン、日陰輝明って言うんだ。また随分微妙な名前だな…。
オッサン…もとい日陰さんをチラ見したら、また照れくさそうに笑った。

…あんた、まさか『も〜ほ〜』じゃねーだろうな…?

日陰氏のハニカミを見て、若干夜が不安になった…。

「踵落としっ!」

なんの前触れもなく俺の脳天にいきなりチンパンの踵が振り落とされた…。

「いつてえーっ!」

頭を抱えて悶絶する俺にチンパンは、

「日陰さんに熱い視線を送ってないで話を聞けやクルアアッ!」

ガラ悪し……

相原風音三十一歳。もちろん独身!! (心の中で声のボリュームをあげてみた)

こんな女が俺の同僚だなんて…悲劇以外の何モノでもない。

そして、こんな女と海外出張先で飛行機事故で無人島生活なんて、

本当…天の誰かさんの嫌がらせとしか言いようがねーよな…。

ああ…いつその事、墜落してそのまんま海の藻屑になればよかったかも。

…いやいやいや！
ダメだダメだっ！

俺には心配して帰りをまっけてくれる心優しきハニーがいるんだ！！

何としても生き延びて、

日本に帰らなきゃ！！

「とにかく！生き延びて帰る方法をつ！」

俺は立ち上がり決意を固める。

「んじゃあ、まずは食料調達を兼ねて、山の探索へれつつらゴー。」

チンパンは声高らかに山を指さす。

「はい？」

あんたは行かないのかよ…と俺は目で語る。

「か弱きレディーに山歩きなどできるわけないだろうが。」

…何がか弱きだ。バカヤロ…。

「勿論ひかつちと二人で行くんだよ。」

ひ、ひかつちて…なにそのあだ名。

ぬふふつと笑うチンパン…。すげーム力つく笑顔だなーこんちくしょー。

「言っとくけど、食料調達するまで帰ってくんなよ。」

はい、なんか今フラグっぽいのが立った。。

「さあ、逝きましようか？」

日陰氏……？なんか表現おかしくね？

つか、はにかむなっ！そして手は繋がんでよしっ！！！！

あ、なんかまたフラグが立った気がする……

かくして、俺のいきなりサバイバル生活が幕を開けたのであった……。

第2話 12月18日をちょっとばかり語ると。(これつまり回想ね)

日本を飛び立ち6日。

飛行機を何度も乗り継ぎ、俺は職場の同僚であるチンパンこと、相いはら原風音と共に世界の秘境とうたわれる、このトリスタ共和国へと降り立った。

トリスタ共和国は南半球にある地図に載らない程小さな島国が連なる国だ。

何故この国に来たかと言うと、実はここトリスタにしか生息、栽培されていない現地語で『ナヤパサ(神の祝福)』と呼ばれる不思議な花を求めて来たのだ。

俺達はその花『ナヤパサ』の買い付け交渉の為にトリスタ共和国に降り立ったのだ。

『ナヤパサ』は、今俺達が働く製薬会社が新しい目玉商品として研究開発している毛生え薬……《アンビシヤスZ》の必須成分を多量に含む植物であると、研究チームの中野博士が突き止め、このトリスタ共和国の存在も奇跡的に掴んだのだ。

んで、営業部の俺達を捕まえてトリスタ共和国に行き、ウチの会社になヤパサを独占的に売って欲しいと交渉して来いと言う事になった。

交渉は流暢な日本語をあやつる通訳のパタヤさん(45歳男)がわりかしスムーズに進行してくれたお陰で、結構とん拍子に我社に独占販売して戴けるの契約を交わす事に成功。

トリスタ共和国のナヤパサ栽培を統括する、日本でいうところの大地主で権力者のカバトスさん（65歳じいさん）は契約の後、

「ゼヒナヤパサバタケをみテッテチヨ〜。」

と話をフツてきたもんだから、まあ、視察しに行くとするかとなつたワケだが…。

そのナヤパサ畑つてのが、トリスタから飛行機に乗り、沖合の小さなナヤパサ専用畑へと飛ばないといけない――んでもって、俺とチンパンはトリスタ共和国記念空港（名前はすごいけど実はかなりシヨボイ空港）からすっげーオンボロな小型旅客機に乗り（俺達以外は畑で働く人間10名程いたかな…）畑へと向かったのである。

離陸する時、機体がやたらギシギシと軋み、なんかとんでもなく嫌な予感がしたんだ…。

「この飛行機、大丈夫つすかね…？」

俺は通訳のパタヤさんに恐る恐る尋ねた。

「ダイジョーブでござりマスル。コレ、カバトス氏のモチモノで、マイニチチャーントまったりとサラダ油タツプリ使ッテ、セービサレチャツテマスから〜」

パタヤさんは流暢な（いや全然そうじゃない）日本語を披露し笑みを俺に返した。…パタヤさん、今サラダ油って言ったよな？ いやいや多分聞き間違い。そう思わなきゃやってらんねーや、マジでよーっ！

とりあえず俺は微妙な愛想笑いで小さく頷いた。

「まゝ、ヒコーキオチタラ海のウエ、オヨゲレバナントカナルデシヨウ〜」

…気楽すぎるぜ、パタヤさん。真ん中に座るパタヤさんの右隣で座ってるチンパン相原は、

「オーっ♪まさにスリルとサスペンスっ！これぞ生きてるって感じよのうっっ♪やっふい〜っ！」

勤務中だと言うのに、トリスタの地酒の瓶を片手に上機嫌――即ち酔っ払いハイテンション状態だ。

（飛行機からノーパラシュートでスカイダイブして海の藻屑になっちまえ、この酔っ払い女め……）

俺は心で毒を吐き、舌打ちと怒り混じりのため息とぐつと堪えて飲みくだった。

とりあえず、無事にナヤパサ畑に到着しますように……。

そう願ひ飛び立った数分後、いきなりの衝撃。

激しい機体の揺れの後、飛行機、急降下

「ア、コリヤオチマスね。」

パタヤさんは『お約束』チックに笑う。

「イッエーイっ！！待ってましたっ！デンジャラスなアクシデントっ！！」

チンパンはげらげら笑って雄叫びをあげる。

「うわあああああああああああ~~~~~っ！！！！」

もちろん俺は近付く死の恐怖に叫び声をあげる。これが普通にマトモなりアクションだろっ！

ガーンッッ！！！！

と凄まじい衝撃の後、目の前真っ暗。つまり、意識が飛んだと言うワケで……………。

で、このワケわかんねー島に流れ着いたと言うワケだ。

ナヤパサ畑の従業員の皆さんは、パイロットはどうなってしまったんだろう…。

パタヤさんの安否も気になる…。
みんな無事だといいが。

俺は空を見上げた。

ふっ、俺の悲しき心を表すかのような青さだぜ…。
ちきしょー、なんか泣きたくなってきた。

「そんなに悲しまないで下さい…。」

俺の手をそつと握る…。

「マジヤメテ下さいよ！日陰さん！」

別の意味でも泣きたくなるぜ。

そんな俺を見つめて、やっぱりテヘッ♪とはにかむ日陰氏…。

やっぱりこのオッサン…『も〜ほ〜』じゃね？

いやいやいや！その前に日陰さん、あんた一体何者なんだ？ナヤパサ畑の従業員だとは思うが、にしちゃーこの辺りの地理にウトイ空気出てるけど……………

不安だ…。

めっちゃ不安だよ…マジで。

第3話・日陰さんと山を歩く。（即ち俺の頭の中は様々な警鐘が鳴りっぱ！）

整備された登山道なんて勿論あるわけがない。

わっさわっさと覆い繁る南国チックな植物。

木や草の名前なんか俺が知る由もなく、ただ目の前の敵・即ちうざったい植物をしかめつつらで掻き分け歩いているワケである。

その後ろには日陰輝明と言う枯れ枝っぱい謎のオッサン。

特技は多分『はにかむ』事。ハニカミ王子ならぬ、ハニカミオッサン…。

全っ然爽やかさも可愛さもない。

（プラス俺は日陰氏は絶対も〜ほ〜と読んでは）

距離を取り上下、前後、左右を警戒して歩く。

「つーか…、毒蛇とかいねーよな。」

俺のつぶやきに日陰さんは、

「この島は湿気が少ないので蛇はいませんよ。」

『マキユポ』ならいますけど。」

は？何？？？

「…『マキユポ』って何？？」

足を止めて何となく恐る恐る日陰氏に尋ねた。

「はい。トリスタの貴重な淡泊源です♪下手な鶏肉より美味しいですよ。」

「いやいやいや！そういう事じゃなくて、どんな姿カタチをしてるかかって聞いているんすけど？」

「どんなカタチって………そんな事…この私と言えるはずないです。」

両手を口元にあてて、まるで乙女な感じで恥じらい笑ってる枯れ

枝的オッサン、日陰輝明。

日陰氏のリアクションに、俺はどう対応したらいいのか正直わからないぜ…。

「これだけは答えて…。危険が危険じゃないか。どっちよ？」

「んー……。」

少し考えた後に、

「相当危険、マジヤバーイって感じかな？」

はい、相当危険でした！！！！

武器も無しでエンカウントしたら、即アウトってワケかよ。

つーかマジで武器とか何もないって洒落になんねーよ！

「古典的でも文句言わないから鋭利な武器が欲しい…」

俺は落胆して地面に向かいつぶやく。

「鋭利な武器ですかあ…」

日陰氏は少し考えるポーズをとり、

「あ、そういえば、あそこの洞穴の奥に武器庫があったような…。」

は？？武器庫？？？

「ねえ、ちょーっとお尋ねしますが、日陰さんてもしかしてこの島が、どんなにか知ってる？」

俺の言葉に日陰氏は、

「ええ、まあ大体は…。」

「それを早く言えよ！」

思わず声を荒げてのツツコミに、…あんたは何故頬を赤く染め体をくねらせて笑うつ！！！！

「つーか、ここ一体どこなんスかっ！？」

猛然と言い放つ俺に日陰氏は、

「現地語では《ナヤンニヨロン》 日本語では『神様から封印れた島』
みたいな意味です。」

うわ、すげえ嫌な名前の島だな・・・

「昔々、ナヤパサを奪う為にトリスタを攻めて来た、ここからから
少し南の島国『ツルンゲピヤ』と戦う際にこの島が前線基地になっ
てたそうです。武器庫はその名残ですね。」

・・・まだ地図に載らない国があったのか・・・

「ま、ツルンゲピヤはトリスタとの戦争後滅びちゃってて無人島に
なってますけどね。」

「滅ぼしたんかい!!」

ビシッとツツコむ俺に

「それだけこのトリスタ共和国にとってナヤパサは大切なモノなん
ですよ」

「…ナヤパサって、そのお、そんなにすごいんすか…?」

俺は日陰さんに尋ねる。

「トリスタの住民を見てわかんと思いますが、トリスタにはハゲは
いません。」

うん、みんな毛ふっさふさだったね。

「実は、私もこの国にたどり着く前はウスラサブい頭の持ち主でし
た。」

なっ、何iiiiiiiiっ!!!

「私は生まれも育ちも雪国の人間で、実家が食用菊を栽培する農家の次男でした。」

日陰さんは身の上を語り出す。

「家系的な遺伝で25歳ですでに頭の8割の毛根が死滅。近所の同い年連中には『頭ぴかチュー』と呼ばれ、タバコ買つてこいやとか、牛とタイマンはれたとか、15キロ程離れた街へダッシュで走つて、焼きそばパンとカフェオレ買つてこいや等、大層可愛がられていました。」

懐かしそうな遠い目で笑みを浮かべる日陰さん。

い
ち
い
ち
い
ち
!
!

それ、絶対可愛がられてないって！！

「そんなある日の事、ここ、トリスタ共和国へ来てナヤパサ栽培の仕事をする事になりました。めでたしめでたし。」

[illegible]

なんか話が一気に飛んだぞっ！！！！

「どうやってトリスタを知りこの国に来たんですか？　つーか、頭ぴかチューが、どうやってふっさふさになったんですかっ！？」

俺は日陰さんの両肩を揺する。

「ぽっ……♪」

頬を上気させる日陰さんを見て、俺の顔面一気に蒼白&チキン肌
おっ立てて、素早く一メートル程離れた。

あぶねーよ。気を許したら何かは知らないがヤラれそうな感じだ。
（もちろん惚れるとかそんなんじゃないぞ！）

「さ、武器庫へ案内します♪行きましよ♪」
日陰さんは、えへっとはにかみ……

「どさくさに紛れて腕組むんじゃねーよっ!」

もちろんソッコー、腕をふり解いた。

「……。」

残念そうな上目使いはヤメロ!!!

もー、絶対決まり!!

このオッサンは乙女系のホモだ!!!

俺は絶対狙われてる!

冗談じゃねーぞウルアアアっ!!!

俺はどノーマルで日本にナミエという素晴らしきハニーがいるんだ
ド畜生めがっ!!!

っーかオッサンとカマ掘ったり掘られたりするくらいなら!

かろうじてギリだけど女のチンパン相原のオッサンをオカズに自
分で×××したほうがまだマシだっ!!!

うう……、ちくしょ……また悲しくなってきた。もう泣くぞ、
マジ泣いちゃうからなっ!!

「ちきしょう……早く武器庫に案内しろ!!」

日陰氏に言い放つと、

「……。」

切ない顔で笑い、歩く足を動かした。

第4話・はいっへマキユポ》出ました！！（っーかマジ俺独り言多い！）

山を歩く進路は大体東かなと適当に思っただけ。
だってコンパスねーし、方角なんてわかるわけねーじゃんよ。

俺の前をなんとなーく元気に歩く日陰氏。鼻唄は15年くらい前のヒットソングらしき歌。ちょうど俺が中学生だった頃よく聴いた歌…（最近捕まっちゃった残念な何とかさんの何とかファミリーの曲）なんだけど、あ・き・ら・かに歌詞以外は全くもって別の歌。
…即ち、すっげえ音痴って事。

っーか日陰氏、あんた一体歳幾つなんだ？

ぱつと見た感じは四十路過ぎ位かな…と思うんだけど、髪がふっさふさだからちと若く見えるだけかも知れないな。

ふん、べつ、別に羨ましくなんてないんだからっつ！

…ふつ、一人心の中でツンデレの真似なんてこの上ない虚しさだぜ、ちきしょー。。。。

山の草ばーぼーの、なーんの変わり映えもない単調で退屈な景色に、欠伸混じりでのそのそ歩く。

俺は手に何となくいい感じの、ちょっと細くて長い棒キレを持ち、時折蜘蛛の巣をていっ…と低いテンションで払いながら進む。

「つきましたよ。ほら」

日陰氏が指さす先には、ぼっかりと口を開けるとこか人工的な雰

困気の洞窟。

「つーかさ、日陰さん。武器庫って言うけど、一体どんな武器があるの？」

俺の問い掛けに、

「いや、私は知りません。実際洞窟に武器庫があるのも職場の噂程度でしか聞いていませんし。」

「噂程度でしかだと？」「じゃ、じゃあ…ここに武器があるって確信があるわけじゃ？」

「はい。ありません。」

おいおいおいおい！！

何なんだ？このアバウトバンザイな展開はよくっ。

俺はがつくりとうなだれそうになりつつも、

「とりあえずこの洞窟、明らかに人工的な匂いがあるから何かあるかも知れない。…中行きますよ！」

洞窟へと足を進めた。

その後ろを日陰氏が続く。

ひんやりと涼しい洞窟内部は、意外と広く開けていて掘った穴の天井やら壁に、洞窟が崩れないように人の手で補強されている感じが見受けられた。

しかし、暗いな…。

懐中電灯もたいまつもないから中はひたすら暗い。

これじゃあ、武器なんて発見できな…

ガスツツ…！！

「いっつ………!!」

何かに弁慶の泣きどころ…即ち臍をぶつけて俺は悶絶してしゃがみ込む。

マジ痛すぎて声がでねえ…。息を詰まらせひたすら痛みを堪えるが当たり前に涙目。

「っーか！何なんだよ！クソツタレ!!」

しゃがみ込んだ状態で膝を強襲しゃがった不屈きな何かにグーパンチ。

ガコンツ…と古い木を叩くような濁いた鈍い音。

「ん…？なんかこれ…」

両手をそれに乗せて輪郭を辿る。

「箱だ…、これ、なんか箱みたいだ。」

横に長い方の側面を探ると、何やら簡単な鍵らしきモノに触れた。
「日陰さん、なんか木の箱みたいなの見つけたから外へ運ぶの手伝って！」

ぼんやりと暗闇に目がなれてきた俺は、日陰氏に向かい声をかけた。

「はい」

日陰氏は弾む声で返事をする、

「オオイっ！！あんだ！どさくさに紛れてどこ触ってたヨっ！」

「エヘッ」間違えちゃった」

うそつけ！！ぜってーわざとだろっつ！！
全く油断もスキもないオッサンだな！！

は？どこを触られたかって…？
んな悍ましい事あ口が裂けても言いたくねーよっ！！

「つーかふざけてねーでさっさと運べよ！」
日陰氏を怒鳴り付けて箱を洞窟の外へと運ぶ。

箱は古びてるけど結構頑丈そうだ。しかし箱についてる鍵は結構
ありきたりで単純な錆びた錠前。

うん、石で叩けば壊せそうだな。
俺は、洞窟の脇に落ちていた手頃なサイズの石を手に持ち、錠前を
ガキンツとうちつけて壊した。

こんな時、中身が素晴らしき金銀財宝でも絶対嬉しくないな…。
いや、強欲なチンパン相原なら、目が\$マークになって狂喜乱舞
する事は間違いないか…。

俺はそんな事を考えながら、箱をそつと開けた。

「よっしゃ！ナイフゲット！」
黒光りする鞘に入った刃渡り25センチ程のナイフは、少し錆び
てはいるものの、まだ十分使える代物だった。

「…ん？これは？」
年期を感じる黄ばんだ紙に何かが包まれている。それをそつと開
けたら…。

「ん？何だこりゃ？」

長さ十センチにも満たない、かりんとうみたいな細長い何か…

「それ、人間の指みたいですね。」

日陰氏はあはっ」と笑う。

「うげえああああああああああー！！！！」

俺は慌ててそれを放り投げ、蒼白してガクブル（ガクガクブルブル震えるの略）状態。

日陰氏は、それが包まれていた紙を手に取り、

「あ、何か書いてありますよ。」

そうつぶやくと紙に目を通して、

「ほうほう、なるほど、なるほど……。」

一人納得した表情で頷く。

「な、なんて書いてあるんだよ……。」

恐る恐る尋ねると、

「『僕の宝物、愛するナハヤタ君のち……』と書いてあります」

「あ……。」

……なんか一瞬ふらあつと意識が飛んだかも。

ち……って何だとかツツコミは一切受け付けねーぞ！！ヒントは阿部定事件だつ！（知りたいんならググれ、若しくはWikipediaへレッツらゴー）

あ……っ！！手に消毒液ぶっかけてアレを触った記憶をナシにしてえよっ！！

つか、結局入ってたのってナイフ一本だけじゃねーかつ！！

こりゃー、アレだな。

バイオハ。ードで言うところのナイフクリアーしてみるや！的な展開だな…。

若しくは、モ。ハンな…。防具ナシ&ハンターナイフのみでイヤ
ンガルルガ討伐してこいや！的な…。

どっちにしるフラグ立ちっぱなしじゃんっ！！
かなりテンパる俺。

「ノブヨシさん、ノブヨシさん…」

と名前を二度呼び、日陰氏は俺の肩をちょいちょいと叩く。

「何だよ！人が悲しみに暮れてるって…。」

「《マキュポ》…」

声が小さくてよく聞き取れねーよ！

「はああ？はつきり喋れよ！」

「マキュポです…！」

日陰氏は俺の後ろを指さす。

「は？マキュポって何だよっ！……マキュポ？」

マ、マ、マキュ…ポ？

「…うそん？」

やんわり引き攣り笑う俺に、

「こんな時に冗談は無理です。」

うわっ！日陰氏の真面目な顔、初めて見たぜ！

俺は恐る恐るそろーりと振り向いた…………。

なっ、何っ！？

マキュポ！何で貝殻のビキニスタイルっ？？？

しかも貝殻ホタテっ！

おまけに貝殻生っばいぞ！！

顔超怖えゝのに胴体は思わず吹き出しそうぐらいのミスマッチ
っぷりに俺は変な汗をかきましたとさっ！！

…て、オオイ！ちよつとまてや！！

マキュポッ！その生っばいホタテ貝殻ビキニ姿で獰猛な顔してファ
イティングポーズで！！

マジですか？

殺^やる気満々ですか……？

それとも笑かす気満々ですか？

はいはい、両方ですね。緊張と緩和が一気にき過ぎて頭テンパっ
て完全に動けねーよ！！

（はい納得、納得）

グルルウ… - -

喉を鳴らして半身構えて、脇をしめ両の拳を握りまるでK-1ファ
イターのような（でもホタテビキニ）軽やかさ&リズムカルさで俺
との間合いを伺うマキュポ…。

い る ん な イ ミ で こ ろ さ れ る

間違いない。

クソッ！こんな状況なのにげらげら笑い転げたい欲望にも負けそう
だ！！

いやいやいやいや！！

俺っ、殴り合いとか格闘技……いや、ぶっちゃけるとスポーツ全般はからつきしダメだし！

足が尋常じゃなく固まり、全く動けねー。

ただ、ついーつと背中から不快極まりない汗が流れるばかり。いつその事爆笑しながら天に召されるってのもアリだろうかとクレイジーな事も思いましたよ。

ああ……。俺の人生もここまでか。

しかもこんなふざけたカッコ（生っぽいホタテビキニ）の珍獣に殺^やられるなんて辱めとは……。

走馬灯のように駆け巡る大して思い出のないショッポい俺の人生……。

ナミエ、ごめんな……。

もうお前を抱きしめてやれないかもしれない。

愛してるよ、ナミエ。

たとえこの身が無くなっても、俺は空からお前の幸せをずっと見守るから……。

ああ、頼むから新聞に載るのは嫌だ……。珍獣マキュポに殺された残念な人間として世間に知れ渡るのは恥ずかし過ぎる。

末代までの恥……

そう考える事数秒後……俺の視界からフツとマキュポが瞬時に消えたと同時に俺の懐、左下からマキュポの拳が俺のボディーに向け放たれる！

(うわああああああああああ！なんかこいつ磯くせえええええー！！！！)

なんか恐ろし過ぎて声などでるわけなく、顔面蒼白でギョツと目をつぶる俺…、心の中でひたすら叫ぶ。

「……………っ！！！」

あれ？なんか痛くないぞ……………？

そーつと目を開けると、

「え・・・？なに？この展開」

目の前には、俺に放たれたマキュポの拳（正確には前足？）をガツシリと片手で受け止める…

「ひ、ひか…げさ…ん……………？」

何これ？マジでワケわかんない。

目が点になる勢いでフリーズしてる俺をちらつと見て、日蔭氏はウフッ♪とデスウインク…じゃないけど、それに近い殺傷力がありそうなゾワ気持ち悪いウインクを飛ばした。

「ノブヨシさんを虐めたら絶対に許さないんだからあああああっ！！」

日蔭氏は残念なセリフを咆哮し、マキュポの拳をミシミシいいそんな強さで握りしめたままで、体を少し屈めて左足を軸にして右足を曲げて膝を突き出しマキュポの顔面目掛けてジャンプ…

「ジャツ、ジャンピングニー（跳び膝蹴り）！」

俺は思わず声を上げる・・・と同時に日蔭氏のガリガリ骨っぽい膝がマキユポの顔面にメキヨッ・・・とメリ込む。

グラツと体を揺らし前のめるマキユポ、その隙をつき日蔭氏は素早くマキユポのバックを取り胴体に両腕を回してロックし

「いくぞおお！ウラアアアッ！！」

会場を煽るレスラーのような雄叫びを上げ、マキユポを・・・！

！！

「かつ！抱えあげたああああーっ！」

マキユポの足が宙に浮き、後ろにブリッジの形で放り投げられる！

これ即ち！！

「決まったあああああっ！！！！

投げっぱなしジャーマンツ！！！」

俺のテンションはさしずめ、プロレスを実況してるアナウンサーって感じた。

マキユポ、ダウン！

しかし、日蔭氏の猛攻は止まらないっ！！

おおっと！日蔭氏っ、マウントポジションを取り、右拳を振り下ろし連打連打連打っ！！

（PRIDEかよっ！！！）

メキヨッ！

ゴスツ！ バキツ！

グツチャツ - グツチャ - - - -

あ……、血飛沫……、
な、なんかグロい……。

うああ……、うつ……！

うえっ……！！

なんかヤバイヤバイヤバイヤバイ……！！

「日蔭さん！お願いっ！もうやめてあげてっ！」
俺は両手で蒼白した顔面を覆って懇願した。

日蔭氏はゆらあり……と立ち上がり、振り返る。
返り血を浴び、虚ろ気な瞳で微笑を浮かべる日蔭氏……

なんつー猟奇的な微笑……。まるで別人！

「食料確保できましたね」
頬についた返り血をペロリと舐めて、ニタリと笑う。

うああ……、全然食したくない……。

ほぼ、殺人現場っぽい状況を目の当たりにして、俺の空腹感は一気に遠退いた……。

つか……、日蔭氏……
強さがクレイジーだよ……。

俺はこの時マジで「人は見かけで判断するな」と言う言葉の意味を悟った……。

プラス、日蔭氏はガチで怒らせちゃいけないと学んだ。

第6話・結局さ、俺って口だけでぶっちゃけみんなの足引っ張ってんじゃないか

なんかどつと疲れた。

あまりにも理解不能な事が起こりすぎるわ、山歩きっぱなしだわ…。

たった数時間ですでに極限状態の俺。

足元がふらっふらする…

そんなおぼつかない俺の前を、鼻唄混じりでまったりと歩く日蔭氏。

ツタの葉っぱみたいなツルで、マウントポジションでフルボッコにされ、天に召されたマキュポが縛り上げられ、ズルズルと引きずられてるその何とも悍ましき光景に、俺のテンションは一気に奈落状態。

33

重苦しいため息しか出てこない俺に日蔭氏は振り向きざま、
「マキュポの肝きもは優れた滋養強壮作用があるんですよ」

屈託のないにつこり。

やめてにつこり。つーか俺は絶対食べねーよ。マキュポなんて。

「なんだか楽しい夜になりそうですね」
はい、トドメの一言。

ははは、もーだめ。

意識が果てしなく遠退いた……。

ああ、このままどうか、目が覚めませんように……。

あ、また夢？

ナミエが喪服姿で泣いてる後姿。

『ナミエ！』

俺はナミエに駆け寄りその背中を抱きしめる。

『ナミエ！っ！会いたかった！俺、帰ってきたぞ！死んでなんかない！ほら、ちゃんと足もあるから！』

肩を微かに動かし、ゆっくり振り向くナミエ……？

「うふん」

「ういやあああああああああああああーっ
！！」

返り血を浴びたデスウインクの日蔭輝明っ！！

やめてっ！！

おっ、お願い！！

こ、来ないでっ！！！！

ちよっ！待って！！

なっ！何すんのよっ！

「ぎいやあああああああああゝっ！！」

「うるさいっ!!」
金切り声と同時に頭を何かで殴られる痛みの反動で体が跳ねあがる……。

「はあ、はあ、はあ、……………」
頭も痛いけど、なんか夢が凄まじい恐ろしさで、呼吸が乱れて茫然自失……。

「…ゆ、夢でよかったっ!!」
なんかもう号泣してしまいたくなるくらい緩和された心。

夢の内容？

知らん!!んなもん思い出したくもねーよっ!!

「ん……?なんか辺りが薄暗い。」

俺は頭を摩りながらゆっくりと立ち上がり、空と海を見つめる。

水平線が薄いオレンジ、その上の空は薄い紺から濃紺のグラデーション。

日暮れか……。

そう思ったら

「全くもって情けない男よね。」

チンパン相原はため息混じりに鼻を鳴らす。

「あれ?そういえば俺、何でここに?」

「山歩きの途中ぶっ倒れるなんて、どんだけ軟弱者なんだよ、お前。ひかつちに迷惑ばっかかけてさあ……。」

若干軽蔑を帯びたチンパンの視線に、

「ふざけんな！！俺がただだけ精神的にキツイ思いをしたか！！お前みたいに浜辺でバカンスよろしくな感じで遊んでたわけじゃねーよっ！」

マジム力つくわ！

このクソアマっ！

「だゝれが遊んでただって？口だけ達者な役立たずのマダオ（まるでダメ男の略）のくせによー。」

チンパンは椰子の実を半分に割った殻を俺にバカッと投げつけた。

「誰がマダオじゃクラアアア！！！」

立ち上がりチンパンに歩み寄り、

「そうゆうオメーは日中何やってたんだよ！！ああ？ゴラアア！」
疲労困憊でイラつく俺に、

「あんた、私にそーんな口の聞き方して言いワケ？」

チンパンはニヤリといじくその悪そうな笑みを浮かべて俺の後方を指さす。

パチパチと何かが弾ける音と、ほんのり上昇温度を感じる背中。
振り向くと、

「あ、火だ。」

俺はなんとも間の抜けた声でつぶやいた。

「ふっふっふっ」

チンパンは白いシャツのポケットからライターを出し笑う。

「うおっ！！文明の利器っ！でも何で？」

「スカートのポケットに入ってたのだよ。タバコはぐっちゃぐちゃになっておじゃんになってたけどさ。」

あ、そっぴゃあ、チンパンタバコ吸う女だったな…。

「っ！か、水没したのにライターって使えるもんなのか？」

「乾けば使えるんだよ。私は何度もポケットに入れっぱなしでライターを洗濯した事があるからな。んな事は常識常識。」

勝ち誇り言う事でもないだろ？

「火の確保だけじゃないぞ。ほれ、あそこをみてみる。」

焚火のほうに見えるのは、

「はっ！！マジ？さ、魚じゃんっ！！！」

俺の目はまさに真ん丸。

「丈夫でしなやかな細い竹のような木を見つけたから、海に潜り、モリの代わりにして魚を突き、「獲ったどーっ！」と食料調達した私にどの口がエラソーな事を？」

ふふん♪と勝ち誇り笑うチンパン…。

悔しい、悔しいけどすげーよチンパン。さすがはアウトドア大好き
原人。

「す、すいません。」

ここは下手に出て謝つとこ。だって、魚見たら猛烈に腹が減ったんだもん。

「まー、私も鬼じゃないからねっ。いくら使えないヘタレハゲでも一応会社の同僚なワケだし」

ヘタレハゲは余分だクソチンパン。

「あんたに何かがあると、ひかっちが悲しむし。」

何それ、やめてよ。

「あ、日蔭さんは…？」

一応、ここまで運んでくれたお礼を。

「何やら捕獲したマキユポでおいしい鍋をご馳走してくれるらしいよ。今、マキユポを捌いてる。」

やっぱり行くのやめ。

解体作業なんか見たくねーし。

「楽しみだねえ、マキユポ」

… 本当この女の順応力は半端ねーな。

本当、こいつ絶対どこでも生きていけるな。

チンパンは笑顔で椰子の実を半分に割った殻の中の白濁色の液体をグビツと飲んでいる。

「つーか、お前さつきから何飲んでんだ？」

そう尋ねる俺にチンパンは、

「ゴンタラって木の実の果汁。飲むか？」

俺に椰子の殻を差し出す。喉渴いてたから無言で頷きそれを受けとり一口飲む。

ごくつ……………ん？

「何これ？酒？」

ゴントラの果汁、濁酒どぶろくみたいな味がする。つか、めっちゃめっちゃまい。

「酒が自生してるなんてこの島、まさにパラダイスよのお」
チンパンはご機嫌に笑って俺の背中をバシッと叩く。
いてーよ。酔いどれチンパン。

毒を吐きつつ、どこか安堵する俺。

魚の焼ける芳しい匂いに混じり、なんかすっぱーうまそうな匂いが漂う。

「さあ、お鍋、できましたよ」

シャコ貝の何倍もの大きさの貝殻を鍋にしての、日蔭氏お手製のマキユポ鍋……。

あ、なんか想像よりも全然うまそうだ…。

一瞬だけ、フルボツコなマキユポを思い出す。

でも、あれだな…。

こうして料理として出されると、牛や豚、鳥なんかを食べるのと同じで不思議と苦にならないみたいだ。

日蔭氏は木の枝をナイフで綺麗に加工し箸やお玉までをも作ってくれていた。何げに器用だぜ、日蔭氏。

器は椰子の実。

全然問題ナシだな。

電灯なんてない、焚火の明かりだけの明かり。

見上げた夜空はきらつきらとまばゆい星だらけ。
枝がパチパチと弾ける音がなんかい。
自然と心が落ち着いていくそんな夜。

「……………」

俺は無言で俯いた。

目から零れ落ちるモノを見られるのはやっぱり恥ずかしいから。

「あら、やだこの子泣いてるわ」

チンパンは、あははっ」と笑いながら豪快に酒を胃に流し込む。

「大丈夫ですよ、きつと、生きて帰れますから。ね」

日蔭氏はにこやかに笑う。

あ、やばい。なんか……今胸に染みた。

「とりあえず、吞んで食べて、歌うぞ!」

チンパンは雄叫びをあげる。

そうして、夜は更けていくのだった。

第7話・色気のねー女が急に色気を出すとロクな事にならんと俺は思っよっ！

マキユポ鍋はびっくりするくらいうまかった！

日蔭氏の作った鍋は、近場に群生する野性の香辛料をふんだんに使った、ちよっとぴり辛なスープカレーのような味だった。

マキユポの肉はとてもさっぱりしているが肉質が柔らかくて、ぴり辛なスープとよくマッチした。

チンパンが獲ったどーした魚も、見た目は色鮮やかないかにも南国チックな感じだけど、味はとても上品な白身でウマすぎだよ！！

味つけは煮詰めた海水から作った塩のみ。でもそのシンプルさが、とてつもなくウマイんだ。

生きててよかった。

この島に来て、ようやくちよっとだけ思った。

やっぱり、人って空腹だと心が荒むもんなんだな…。なんか、ほんのちよっとだけ日蔭氏とチンパンに申し訳ないと言う気持ちも芽生える程、俺の心は満たされている。

小さく笑みさえ零れた俺を見つめて、

「やっとノブヨシさんの笑顔が見れました♪」

日蔭氏は俺の隣にすすすゝと間合いを詰めて座る。

「い、いや…、俺、本当すいません。あんまり役にたつてなくて。」

そつやんわり謝りつつ、俺はすすすゝと横にずれて距離をとる。
「いいんですよ♪ノブヨシさんはその存在だけで価値があるんです

からっ」

すすすっ…と近づく日蔭氏。

「いやいやいや、とんでもないツス！明日からまた足引つ張らないように頑張ります。」

すすすっ…と逃げる俺。

「あゝっはははっ」あんたら何焚火の周り横回りしてんのっ？」

チンパンは椰子の実の殻に注いだゴンタラの醗酵果汁 - 即ち酒を片手に上機嫌で笑う。

ひたすら呑んでるよ、こいつ……。多分この島のゴンタラをすべて呑み尽くすつもりだろうな。

…もしゴンタラがなくなったら、チンパンはアル中の禁断症状に陥るんじゃないかと、ちよっと不安になった……。

「あゝ、シャワー浴びて海水に浸かった体を洗い流したい！髪の毛がパッサパサで気持ち悪い！」

チンパンは足をバタバタさせて突然駄々をこねだした。

「天然温泉でもあれば最高なのにっ！オイコラ！佐々木っ！温泉掘り当ててこいや。」

「…何だよ、その無茶振り……。んなもん無理に決まってる？」ため息をついて薪を火にほつり込む。

おおっ、夜空に舞い上がる火の粉が綺麗だなあ…。

「温泉はさすがに無理ですが、洞窟の近くにちよつとした川がありましたよ。水も飲めるほど澄んでいて綺麗です。」

日蔭氏、余計な情報をチンパンに与えないほうが……

「よし、そこ行こう。」

ほらね。チンパンノリノリ…。

「あのさー、こんな夜更けに山歩きなんて危ねーだろ?」

俺は勿論乗る気ナシ。

だって、またマキユポやら、得体の知れない何かが出るかもしれないし。

「役立たずのヘナチヨコハゲりんこんなか誰が連れてくかってーの。ひかつちー、ガイドプリーズ。」

「くすっ、かわいい♪ハゲりんこ♪」

「だから！クスツて笑うなよ！！つーかハゲりんこって何だよ！」

「そんなの知るかじゃん。あー、あれだわ『髪』のお告げ。」

あつは♪と笑うチンパン。隣で小さく「失礼ですって……」とか言いながらぶるぶると枯れ枝っぽい体を揺らし、笑いを堪える日蔭氏。オオイ！失礼とか言う言葉自体が失礼極まりねーよなっ！！

くぬうううっ！！

狙ったようなうっとしい誤字をひけらかし、俺の頭部をバカにしやがって！！

つーか日蔭氏よ、あんたも昔は俺の仲間……いや、毛根八割死滅てもつとヤバかったはずだろ？

こーなったら絶対にナヤパサをゲットして、雨にも風にも負けな
いふっさふさな頭部になつてやるし！！

「…で結局、こうなるんだ。」

俺は松明^{たいまつ}を手のため息混じりにつぶやく。

「文句があるなら火の番しながら今からでも浜辺に戻って留守番してればいいじゃん。」

チンパンは若干千鳥足でげらげら笑う。

「う、うるせーよ！つーか夜に一人は怖いから無理に決まってる！」

「んまー、相変わらずのヘタレ発言。引くわ、あんたのその頭、超サブくて引く。」

「頭全っ然関係ないやろがあああつ！ゴラアアア！！」

全くもって理不尽な扱いだな！

「大丈夫です。私はノブヨシさんが『うすラ』でも全然問題ありません。」

その発言は問題アリアリです！！

つーか『うすラ』って何だよ！

今時の若者に『アムラ』みたいな言い回しは古臭くて通じねーよ！！

しかもカリスマ的リスペクト感ゼロじゃねーかつ！

「ぎやはははっ、ひかつちウマイっ、うすラってナイスネーミングっ」

へいへい。三十路女にはウケるだろうな。

安室奈美恵 - 即ち小。ファミリー世代だからな。ちなみに『アムラー』とは、当時コギャルのカリスマだった安室ファッシュョンをリスペクトして、安室と同じ格好をしていたギャル達の総称である（はず）

歩く事10分程で、ナイフをゲットした洞窟――即ち、マキユポフルボツコ殺人事件現場横の小さな川に到着。

なだらかに水流るる音。昼間ならば清らかな感じだろうけど、夜って事でなんか不気味な感じ。

夜行性の鳥――梟みたいなモンだろうか…？

なんかホーホーと鳴いてるし、時々バサバサと羽ばたきの音が響く。

「おほっっ、冷たくて気持ちいいっっ」

チンパンは川に両足をつ込み歓喜の咆哮。

「さてさて、磯臭い身体を洗い流しますか」

チンパン相原は白いシャツのボタンを躊躇なく外す。

「ちよつと待ていつ！」

慌てて阻止するは勿論俺。

「何だよ…、」

「いやいやいやいや！おかしいだろ？一応ここに二人男がいるのに、何故戸惑いや恥じらいもなく普通に服を脱ごうとする！？」

俺のツツコミに、

「は？別に男だと思ってないし。男ってより、その辺に転がる石ころ低度の存在でしかないし。」

グハッ――！！

い、石ころ扱いされた！

「おつ、お前は気にならなくても俺は気になるだろー！がつー！――応女なんだからよーっ！」

「…あんた、本当面倒臭い男よのう…。」

「お前がアバウトでオープン過ぎるんじゃないっ！」

雄叫ぶ俺を見て、やれやれ染みため息を吐き、

「じゃあ、テイク2で。」
テイク2でフリはやめる。

チンパン相原は、シャツのボタンに手をかけて、こちらをちらつと見つめて、

「ちよつ、ちよつとおゝつ！こつちみたら絶対許さないんだからあ
あっ！」

ソプラノアニメ声を披露し、胸元をわざとらしく隠して身体をよ
じった恥じらいのキメポーズを取る。

これが演技じゃなく、リアルな反応なら、俺の胸はきつとドキ
ンとなる運びなんだろうけど、チンパンの開けっぴろげな性格を知
る以上は、ドキーンは完全にナシの方向で……。

遭難した女とラブロマンスなんて、所詮絵空事なんだろうな…。
なんかちよつと虚しいぞ、ちきしょー。。。

そんな事を思いたため息をついてチンパンに背中を向ける。

川のせせらぎに反する水の音^ね

「ふんふんふん」

ご機嫌な鼻唄。

川岸にパサリと落ちる衣服の音。

「ん」♪素晴らしい開放感♪裸族の気持ちがよくわかるね」

パチャパチャと水の跳ねる音と相原の嬉しそうな声。

「ノブヨシさん、ノブヨシさん……」

隣の日蔭氏が俺の肩を二度叩く。

「どうかしました…?」

俺は眉をひそめる。

「ちよつと、あのお、そのお……。」

何?なんかもじもじくねくねと……。

「どうしたんですか?」

俺はますます顔をしかめる。

「お、お花つみに行きたいのですが……」

「お花つみ?なんでこんな時に花なんかつむんですか?」

俺は首を傾げる。

「バーカっ!レディーが花つみつったら『トイレ』って事だよ!察してやれよ!デリカシーのない奴だなあ!」

川ん中からチンパンが吠える。

「そんな表現されて気付けるかよっ!つかレディーて表現も間違ってるし!」

思わず声を荒げたら、

「……………」

日蔭氏、何故悲しげな瞳……?つか、何げに油汗かいてるよ。何故そんなに我慢してたんだよ……。

「……はあ……、どーぞどーぞいつてらっしゃい。」

とりあえずつくり笑顔を日蔭氏に向けた。

「お、音……聞かないで下さいねっ!」

聞いても間違いなくノーリアクションだよ!

ああ、チンパンと日蔭氏の性格が入れ代われば、俺の遭難生活は

ちょっと色めき、艶めきするんじゃないかと……。

「つーかその前に日蔭氏の乙女的振る舞いに段々慣れてきてる自分が正直怖いぜ……。」

「はぁ……。」

またひとつため息が出た。

「なーに景気の悪いため息ついてんのよ。」

川からチンパンの声。

「別に……。」

一言だけ返して地面を足でまさぐる。

「またぐじぐじと腐った事考えてるのかよ……。」

呆れ混じりの声。

「そんなんじゃないし……。」

「全くネガティブな男よのう……。」

「うつせーよ。こんな状況でポジティブになれるような図太きなんか俺にはないんだよ……。」

「はんっ、図太きバンザイだよ。じゃなきゃこの歳になって独身のキヤリアウーマンなんて務まらないからね。」

相原は笑う。

「お前、淋しくないのか……?」

「全っ然。好き勝手自由な独身貴族バンザイだね。」

「俺は一人は無理だな……。淋しいの苦手だし」

小さく笑ったら、

パシヤッ――!!

うおっ！背中冷てええっ！

チンパン！水かけやがった!!

「何すんだ！コノヤ――!!!!」

やべっ!!

つい振り返っちまった!

「……………」

「……………」

止。
松明の明かりに揺らめくチンパンの裸体を見てゼロコンマ数秒停止。

「あつ!そつ!ゴツゴメン!!」

ワケわかんねー事叫び、俺は慌ててチンパンに背を向ける。

「くすくすつ……………」

相原は楽しげに笑い、

「とてもいい歳したセックス経験済み男のリアクションとは思えないなあ…」

パチャパチャと跳ねる水音と共に相原は笑う。

「ばっ!ばかにすんじゃねーぞつ!お、女の裸くらいで、て、テンパるワケねーだろつ!!」

嘘です。かなりテンパってます……。

いや、マジびびった!!

相原: ナイスバディ…。着痩せするタイプか? しっかり出るとこ出てる - - 即ち、オッパイ結構デカイ!!

「ちなみに私、Cカップよ、おっほっほ」

どっ、読心術っ!?

「触りたい?」

「は?バツ!バカじゃねっ?」

「いいのよ〜ん、別に夜空の下での淫らなアバンチュール」
波立つ水音が近づく……。

「お、お前とつア、アアアバンチュールなんてっ!!」
「っか!早まるな!俺の心臓クンッ!

相手は凶悪凶暴極まりないチンパンだぞっ!

うおあっ!!!

せっ、背中にポヨポヨンとした素晴らしき感触!

「ちょっ!マジやめろって!!」

「いいじゃん、お互い欲望を開放して溜まったモノを吐きだしちゃ
お」

背中から悪魔の囁き。

ちよい!後ろから手を身体に這わせないでっ!

「っかっ!何でいきなりエロスイッチ入ってんだよ!」

「ん〜っ……、しこたま呑んでるからかなあ?野外で裸の心地良い
開放感にタガが外れたって感じ?」

随分と外れ易いタガだな!!

「いやいやいや!!マジで!本当マジでやめところかっっ!?!」

俺のタガが外れる前に!

その時…、前方にたいまつのみかり。

「……………」

あ、日蔭氏が…。

無言で立ち尽くしてる。

あ、なんか…

なんか………

何？この罪悪感みたいな気持ち………。

第8話・星降る夜に何かが起こる？（お化けだけは頼むからマジ勘弁してくれっ

揺らめく松明^{たいまつ}を手に、数メートル先に立ち尽くす日蔭氏。

俺の背中には夢心地の柔らかい物体が二つ。

そして俺の脇腹から二ヨッキリと生えた（ように見えるだろう）俺のものではない細い腕が二本。勿論言わずと知れたチンパン相原の腕だ。

そして何故か浮気現場を彼女に押さえられたみたいに、徐々に顔面の血液がしたにザアアーっと下がっていく俺・・・

何？この昼ドラクサイチープな構成・・・

日蔭氏はカラン・・・と松明を落とす。

「ひっ！日蔭さんっ！危ないですっ！山火事になりますって!!」

俺はチンパンの腕を振りほどき、慌てて松明を拾いに日蔭氏の元へダッシュ。

「ま...、まさか...そんなあ.....。」

悲壮感たつぷりの鬱々とした微笑を浮かべて小さくつぶやく日蔭氏。

（っ！か、みんな気確かに！こいつのナリは枯れ枝っぽいオッサンですからあああっ!!）

「いやいやいやいや!!あのっ！あっ、あれはじじじじこっちゅ

「うかなんちゆうか！」

あああああああつ！！！！！！

俺さ何でもって言い訳しようとしてんだっ！！！！

展開オカシイだろっ！

「……そうなんだあ……。そうゆうコトだったんだあ……。」

俺から視線を少し外し、エヘッ…と泣きだしそんな顔で小さく笑う日蔭氏。

ノ
ー
ー
ー
ー
ー
ー
ッ
!
!
!

リアル彼女……ってか、リアル彼女のナミエにならば、

『違うんだ！ちゃんと事情を説明させてくれ！そして俺を信じてくれ！』と叫びますよ。

でもさー、目の前に佇むのは紛れも無くオッサンなんだよ!!!!

マジでどないせーっちゅうねんっ！！

声なくバタバタとするばかりの俺に日蔭氏は

「いいんです……、私は日蔭にひっそりと咲く、誰にも愛されない存在の薄い花ですから……。」

う
あ
あ
あ
あ
...

儚げな表現を駆使してるつもりだろうけどさあ……、存在感薄いつてのは戴けねーよ。

あんたの存在感は、もはや主役を喰ってますからー。

「……そうですね……、幾ら私の心が清らかな乙女でも、現実はいい

歳した中年男子。成熟したフェロモンを振り撒く女体の魅力には到底敵いませんもの……。」

はい。今清らかな乙女って言った。

日蔭輝明、あっさりともーほーカミングアウト。

「でも、でも…やっぱり…私は…ノブヨシ君が…す…」
「ノooooooooooooッ！」

とりあえずこの状況に耐えられるわけなくダッシュで基地（浜辺）へとエスケープ――即ち逃亡した。

「はあっ、はあっ、はあっ、はあっ……っ！」

松明を焚火にほうり込み、仰向けで砂浜にバタツと倒れ込む。

「気っ、気が変になりそうだ……!!」
満点の星空に向かい叫ぶ。

チンパンに色じかけされるわ、もーほーに告られそうになるわ！
！

なんでこうも俺だけメンタルを集中攻撃されるかねーっ!?

俺が何か悪いコトしたかよっ!!

生まれて二十九年、ひっそりと平凡ながらも人サマに言う程迷惑もかけずに、真面目に生きてきたじゃねーかつ！

仕事だつて自分なりに真面目に頑張つて頑張つて！！
ナミエとの平凡でささやかだけど幸せな未来を願つて一生懸命生
きてきたのにっ！！

「何だよ！この仕打ちはよおおおおーッ！」
ああ、もうダメ…。

限界。

心のキャパの器から哀しみがだだ漏れて溢れ返つて溺れ死にそう
だ。

ああ、星になりたい。
俺も天に輝く星になつてしまいたい……。

ガサガサッ！！！！

ビクッッ！！

茂みが揺れる音に思わず身体が跳ね上がり硬直する。

チンパン達ならば松明の明かりがあるはずだが、辺りには明かり
なんて全くない。

「……………」。
息を潜めて気配を探る……。勿論心臓クンは半端ない速さ。
なになになになになになになにっ！！？

息を詰めてゆっくりと体制を仰向けから俯せに変えて、焚火の近
くへと歩伏前進（ばい動き）

ガサガサッ！！

ビクツッ！！

ま、また揺れたっ！！

焚火に身を潜めて、揺れた茂みに目を凝らす。

むしゃむしゃ。ぴちゃぴちゃ……ごくんっ。

えっ！！なんか食べる音聞こえるぞ……。

少し、また少しと歩伏前進してその音の主に近付く。そこには、

「え……？」

やべえ！声出たっ！

俺は慌てて立ち上がる。

「っ！！！！」

俺に気付いたソイツ……こ、子供っ！？

何でこんなところに子供がいるんだよ！！

バサバサした長い黒髪（だと思っ）にくすんだ麻の服（ワンピースにも見える）肌は多分褐色だろう。

数秒佇み、右腕で口を拭い、

「ナヤ カラタ ウトパタ……！！」

そう叫び茂みの中に消えた。

「ちよっ！！」

俺は手を伸ばし子供を追い掛けようとしたが、慣れない真っ暗闇の山の中じゃ、到底追いつく事などできないだろうと諦めた。

「とりあえずチンパンと日蔭さんを待たなくちゃ……。」

ナヤ カラタ ウトパタ

俺は砂の上に子供が放った言葉を忘れないように書き留めた。

第9話・ナヤ カラタ ウトパタって一体どうゆう意味なんだ？

ナヤ カラタ ウトパタ

謎の言葉を残し山の奥へと消えた子供。

決して幽霊なんかじゃない。だってさ少し残ったマキュポ鍋と焼き魚が綺麗さっぱりに無くなってから……。

しかし、何だってこんな孤島に子供がいるんだ？

原住民にしちゃちょっと目がやさぐれてたような……。

もしかして、俺達がここにたどり着く以前に遭難した人間がいるとか……？

だとしたら、あの子供の親がどこにいても知れない。

でももしいなかったとしてたら、あの子一人じゃ孤島暮らしはかなり厳しいだろうな……。

どっちにしろ、チンパンと日蔭氏が戻って事情を説明して、夜が明けてからあの子を捜してみるかと考えた。

それからしばらくして、チンパン達がさっきの修羅場(?)はどこ吹く風な感じで、何故かしらご機嫌で戻ってきた。

「…お、おかえり。」

とりあえず逃亡した俺は気まずさを残しつつ、何となくの挨拶。

「焚火番ご苦労『脱兎ウスラ』 何か変わった事は？」

…もういいよ。はいはい、好きに呼べよ。

チンパンの問い掛けに

「あつ！そうそう！日蔭さんつつ！」

俺は砂に書き留めた言葉を読みあげる。

「ナヤ カラタ ウトパタってどういう意味？」

俺の言葉に日蔭氏は、

「ナ、ナヤ カラタ ウト……？」

日蔭氏の顔がみるみるうちに真っ赤になる。

「そう！ナヤ カラタ ウトパ……」

「いやああんっ！ノブヨシさんのえっちいいい……ッ！」

日蔭氏は顔を両の手で覆い隠して、首を左右にブルンブルンと振る。

え……？ 何？何？

その、風呂を覗かれた『のびたさんのえっちいいい……ッ！』みたいな、しずかちゃん的なリアクションは……

「もしかしてさあ、それって放送禁止用語？」

チンパンは日蔭氏の尋常じゃなく恥ずかしがる様子を見てつぶやく。

日蔭氏はチンパンの隣に小走りに駆け寄り、小さく何かを耳打ちした。

瞬間……

「ぶっふああーっ！！」

勢いよく吹き出して俺を指さしげらげら笑い出す。

「なっ、何だよーっ！俺そんなスゲーヤバイ事言ったか??」

言葉の意味は不明だが、なんか異様に辱めを受けた気分になってきた。

「ヤバイって！！佐々木いっっ！お前ど変態だなあっっ！！」

大口開けて両手をバシバシと叩いて爆笑するチンパン。

あ、なんか昔シンバル持ったそーゆー感じのサルの人形あったな。

いやいやいやー！

「つーか！笑ってねーで意味教えろよ！」

「ダメだね。完璧放送禁止用語だし。」

「やんわりとオブラートに包んで言えばセーフだろうが！」

「「うーん……」」

チンパンと日蔭氏は顔を見合わせ腕組みをして数十秒考えこむ……
がしかし、

「無理。難しい。」

「私もうまく思いつきません。」

二人息を揃えてやんわりと首を振りギブアップ。

「もういいよ！耳打ちでいいから教えろ！」

「よし。ひかっち、レッツらゴー」

「えええっ！かざねちゃん、わ、私っ恥ずかしいですうっ！」

真っ赤になつてバタバタと足ぶみして悶える乙女的なオッサン・

・即ち日蔭氏。

「何でよ、佐々木に近付く絶好のチャンスじゃんっ、ひかっちファイトだよーッ」

チンパンは日蔭氏の両肩に手を置き、励ましのエールを贈る。

え？ 何……？

明らかにこいつら、めっちゃ距離が縮まってねーか……？

「じゃ、じゃあ、がんばりますっ」かざねちゃん、見守っていて下さいねっ」

「キヤーっ」イケイケっ」ひかっちいっ」

オイ！！いい歳こいた二人、何キャピキャピ感だしてんだよ！一体二人に何があつたんだよっ！

もじもじくねくねと頬を赤らめ、八二カミながら奴が俺に歩み寄る…。

うわ…、日蔭氏い、なんか笑顔が超恐えよ。

そして、うああああっ！！超近い近い近ーいつ！！

「いつ、いやっ、そんなに近付かなくても大丈夫だから。耳はかなりイイので……。」

さりげなくちよつと横にずれる。

「えゝっ♪知りたくないんですか？言葉の意・味。」

ゾワツ…と足に鳥肌。

ガクブルしたいがとりあえず、

「……サクツと手短かにお願いします。」

俺は目をぎゅつとつぶり拷問に堪える。

「あのですねえ……」

「…はい？」

小さく頷く。

「ふう〜〜〜っ ♪♪」

「……！！」

うおーーっふー！！

鳥肌大全開で数メートル逃亡っ！！！！

「あーあーあーあーっ！！はいはいはいはいっ！！絶っつ対やると思っただよーっ！！！！！！」

耳ふ〜〜っでどんだけベタ好きなんだよ！！

あ、なんか痒くなってきた……蕁麻疹でるかも。

「軽いジョークですよ」

「エヘッ」とはにかむなつちゅーのつつ！

「マジちゃんとして下さいよ！次やったら本当怒りますよ！」

「んもう、ノブヨシさんだったらあ かゝわゝいゝいつ」

「そんなあんたがこゝわゝいゝッ！」

…再度近付く日蔭氏。

拷問テイク2に勿論身体は否応なしに強張る…。

「……………」

日蔭氏の恥ずかしがり屋さんじみた耳打ちに、

「・・・は？マジ？」

俺は思わず目が点。

「はい、本当にそう言う意味ですう…。」

日蔭氏は猛烈に赤面してキャッ……と両腕を横に振ってチンパンの元へ走る。

「さて、オブラートに包んでやんわりと通訳して貰おうかね？佐々木君よ……………」

「……………」

とりあえず、数十秒黙り込み考えてみる。

うーん、うーん…。

「思いついたかね？」

「……要するに、口には出せないとしてもなく卑猥な言葉。」

「それさあ、…包み過ぎじゃん？全っ然伝わんないし。」

「いいんだよ。人間の想像力つてのは結構凄まじいから、あれこれ好きに当て嵌めてニヤツとするのが正解って事で。」

「っかね、ちびっこがあんなクレイジーエロな言葉を吐き捨てて暗闇に消えるなんて……」

「スレ過ぎだぜ、マジで……」

「なんかまたため息が出た。」

「てか、そんなエログロな言葉をどこで仕入れたんだ、エロガッパ。」

「チンパンニヤニヤ。」

「はあああ？ちよつと待てや！薄いのは認めるがカッパ発言は断固として認めねーぞ！髪の手毛ちゃんとありますうう！」

「っかぶつちゃけエロいのはお前だろっ！さっきの《行為》を棚に上げてどの口が人をエロ呼ばわりしてんだヨッ！」

「あ……、せつかく癒えたひかつちの心をよくもエグッたな……。」

「あ……やべっ」

「ちらつと日蔭氏を見たらふっ……と虚ろ気な遠い目……」

「あーっもー、めんどくせー！もーいいしっ！はいはいー、全部リセットリセットっ！んで話進めるから。サクッと本題いくからっ！」

「俺は、先刻の子供の話を二人にした。」

「幽霊じゃないの？」

「チンパンはまたグビツと酒を煽りだした。」

「……ここ数年、誰かが遭難したと言う情報はないですけどねえ……」

「日蔭氏も首を捻る。」

「でも確かにいたんだよ、子供が。で、鍋の残りや魚の残りを食べて山の中逃げたんだよ。」

「……でも、この界限に子供が身を潜める場所なんてあるかあ？」

「身を潜める場所………あ、あるじゃん。」

俺はあの場所――即ち、洞窟を思い浮かべる。

「でも、私達、あの場所から帰って来たのに別に人らしきモノとは遭遇しませんでしたよ。」

「ん……でもさ、奥まで探検してみるのは何気に楽しそうだよな
」

チンパン、目的間違えてるぞ。

オメーの冒険心を満たす為のイベント企画会議じゃねーよ。

「とりあえず、なんか小さな手掛かりがあるかも知れないから、明日行ってみようぜ。」

「ほー、ヘナチヨコウスラハゲリンコフ、今回は随分と乗り気じやん。」

何だよチンパン、そのめんどくさくて長いネーミングは……、思いつつも、

「だってよ、もしも子供一人ならやつぱり……なあ。」

絶対に心細いだろうし……。

「ははっ、あんたは小動物とちびっこにはしこたま優しい奴だからな。」

「うーん、素敵っ。惚れ直しちゃいますねっ」

いや、惚れ直さなくて結構ですから。つーか忘れて欲しいよ恋心。。。

「じゃあ、とりあえず明日は朝一から洞窟探険で決定って事で。かんぱい」

一人で乾杯してろ。

んで泥酔の後、一人だけ高潮にザッパーンてさらわれる。

「私は明日に備えて眠ります。おやすみなさい」

日蔭氏はぺきんと枝を折るかのように体を折りたたみ、ころんと

砂浜に寝転がった。

…奴がちゃんと熟睡したら俺も寝ようと思う。

とりあえず砂浜にごろりと寝転び、また夜空を仰ぎ見る。

ほんと、綺麗だなあ…

こんな綺麗な満天の星をナミエと二人で見れたら、どんなに幸せだろうなあ。

ああ、ナミエ、…今頃俺の遭難を知って泣いてるかも知れないなあ…。

「大丈夫、俺、ちゃんと生きてるからさあ……」

そんな事を考えてたら、いつの間にか深い眠りに落ちていた。

第10話・勘違いされてると困るからはっきり言っとく。俺はMじゃねーからな

あ、また夢…？

俺、この島に遭難してからなんか夢ばかり見てるな…。

「ノブヨシ君…いつまで寝てるのおっ！もう朝だぞおっ」

ああ、愛しきマイハニー、ナミエの少し低音だけど甘い声。

『うーん、あと5分』

俺はいつものようにナミエの優しい起こし方に甘えてうたた寝を続ける。

「んもうっ！起きなきゃこうだぞっ」

唇に触れる温かくも柔らかな感触。

吐息と混じる小さな囁き。

「ノブヨシ…くうん…」

そう名を、愛しそうに何度も呼びながら、ナミエの白くか細い指が俺の高揚した身体を這い纏わり…。

そんなナミエの背中をまさぐり、ゆつくりと胸元へと手を…。

「あっ…んっ」

ナミエの唇からこぼれる恥じらい混じりの悦びの息…。

ん…？ナミエ、しばらくしないうちになんか、おっぱいが…育った？

っーか、なんかナミエ、磯の香が…。

ゆつくり目を開けると…何？…真っ暗。

「くすくすっ」

「くっくっくっ…!!」

「……………」

なんか顔がポヨポヨ&グニョツ・ヌメヌメ…

俺はそーっと顔の感触に手をあてがう。

ギューーッ!!

「いだだだだだっ!」

なにかがスゲー勢いで吸い付いたっ!!!

俺はガバツと跳ね起きる。

「ぎやはははっ!」

「かざねちゃん、ダメですよ」そんなに笑っちゃ。ぷっ、くすくすくす。

目を開け、右手に吸い付き絡み付く『何か』を凝視する事数秒 - 後、

「いぎゃあああああああああああー!!!」

慌てて右手をブンブンと振り、『ソイツ』を放り投げる。

「なにになになになにっ!今の何だよおおおっ!くせーっ!なんか顔めっちゃ生臭せーっ!」

慌てて波打ち際にダッシュして顔をバシャシャーっと洗う。

背中にはうぜーチンパンの歡喜に満ちたソプラノと日蔭氏の乙女チックな低いテノールのアンバランスな不協和音・・・即ち笑い声、しかも大爆笑ときたもんだ！

「あゝあつ、マジ笑えるわ、佐々木のリアクションっ」
「ひーひーと腹を押さえて悶えるチンパン。」

「っーか！！何だよっ！今のグロい物体！！」
俺の絶叫に、

「タコが捕れたんですよ」茹でて朝ご飯で食べようかなあと」
日蔭氏は口元に両手をあてがいがい笑う。

「じゃあさつさと茹でればいいじゃん！何故人の顔に乗せてげらげら笑ってんだよ！」
半ばブチ切れて怒声を放つ。

「だって、あんた全っ然起きないもん。ってかさあ、寝言キモいよ。」
目頭を押さえて身体をよじりながら俺を指さす。

チンパン笑いすぎだぜっ！！クソッ！！

「ナミエ、ナミエって連呼してすっげえ悶えてなんかおっ立ててるし。ひかっち超喜んで「かゝわゝいい」って《なでなで》してたしっ」
「いやんっ」かざねちゃんっ」《なでなで》したコトは内緒ねって言ったのにっ」

頬を染め、体をくねらすオッサン・・・即ち、日蔭氏を見て…

あ、なんか白目むいて倒れそうだぞ、俺・・・

気を確かにつ！

倒れたらもうほくの餌食になるだろうっ！！

っ！か朝からどんだけ俺は拷問をうけてるんだっ！

朝くらい普通に目覚めさせてくれよっ！！

朝メシに茹でたタコをむしゃむしゃと食べて、三人揃い洞窟へと向かう。

昨日日蔭氏がナイフで覆い茂る植物を切り落とし、歩く道を確保してくれたお陰で、わりかしスムーズに歩けるようになったから、今日は歩みが少し楽だ。

「うおおっ！すごいでっかいクワガタっ！」

チンパンは少し背が高めの木を指さし雄叫ぶ。

「捕まえて日本で売ったら幾らになるかなあ？」

絶対言うつと思ったぜ。

っ！か持ち帰りは普通に無理だろ？いや、この際密輸して捕まっちゃうのも俺的にはアリかな。

「てかさ、日蔭さん。トリスタ共和国が戦争したって話、あれはどれくらい前の話なの？」

俺は日蔭氏の手携えられた軍用であろうナイフを見て、何となく尋ねた。

「私がトリスタに拉致されて15年経ちますが、戦争が終決したのはその前の年だと同僚に聞きました。」

ちよっと待て、今なんかさらっとスゲー問題発言しなかったか？

「何？ひかつち、トリスタ人に拉致られたの？」

チンパンがちょっと驚きの表情で日蔭氏を見つめる。

「…とある１５年前の早朝に、実家の食用菊栽培のハウスへ行く途中で、謎の外人さんに『カミ、フサフサニナリタイカ？』と尋ねられて、はいと返事をしたら、目隠しをされて船らしきものに乗せられて、あれよあれよという間にこの国へ。」

なんかさ、緊張感ゼロな拉致られ方だな。

「色々と事情を聞いたら、その年はナヤパサ畑に…植物にとって有害な病気が発生して、是非日本の農家のエキスパートの力を借りたいとお願いされて、私はナヤパサを救う為に持てる知識を駆使してナヤパサの為に尽力したのです。そして、現地従業員と力を合わせてナヤパサの危機回避に成功しました。」

へえ、日蔭氏…、ナヤパサ畑を救ったんだ。
ちよつとだけ尊敬。

「そのお礼に毛髪再生とこの国の栄誉勲章と一軒家とナヤパサ畑の管理長という役職を戴きました。」

日蔭氏はにっこりと笑った。

「ひかつち、日本には帰らないの？」

チンパンの問い掛けに

「きつかけはどうであれ、私はトリスタ共和国をとて愛しているんです。故郷（くに）の両親には申し訳ないけれど、私は元より農家の次男ですし、兄が後を継ぐから私がいなくてもたいした問題はないでしょう。私はね、この愛するトリスタの地に骨を埋めるつもりです。」

ほんの少し淋しげにも見えたがしかし、とても穏やかで澄んだ瞳をのぞかせ笑う日蔭氏を見て、ちよつとだけ胸が奮えた気がした。

わかつてる。この人、根っこはいい人なんだよ。多分普通のオッサンならかなりリスペクトしてたかもな…。

少し沈黙して三人歩く。

「そう言えば、どうして戦争の話なんて？」

日蔭氏は思い出したかのように俺に尋ねる。

「ん、そのナイフ見てさあ、何となく聞きたくなっただけ。」

俺は日蔭氏にやんわりと笑みを返した。

それから、たわいない談笑をしながら俺達は洞窟の入口へとたどり着いた。

第11話・洞窟の中へレッツらゴー。（チンパンよ、何故お前はそもそもデンジャ

洞窟の前で松明^{たいまつ}に火をつけて、

「んまー、気分は川口ひろしって感じかつ？ヘルメットも頭につける電気もないけどな、あっはは〜ん」

声デケエよ！つーかやたら響いて耳が痛いぞ、コノヤローっ！！

…つかチンパン、川口探険隊で古過ぎてちびっこにはまったくもってわかんねーよ。つーかあの番組ってマジヤ×セだったのかなあ…。

あ、なんか連想ゲーム的に嘉門たつおを思い出しちゃったぞ。なんか昔♪ゆけ〜、ゆけ〜かわぐちひろし〜♪とか歌ってなかったっけか？

つーか嘉門たつお、何故かウチの小学校の給食の時間にしょっちゅうかかってたな…。

♪ちやらり〜ん鼻から牛乳〜♪とか、放送委員どーゆー曲かけてんだよっ！てげらげら笑ってたなあ…。

あ、やべえ。いらん連想膨らみ過ぎだぞ俺。

つーかさチンパン、普通に『インディー・ジョーンズ』辺りに例えとけよ。

「ワクワク感バンザイよのう〜いでよ、デンジャラスなハプニングっ！」

「頼むからそんなハプニングを望まないでくれ。お前が言うത്マジで起きる気がする。」

だってリアルに飛行機も落ちたしな……。

そう願いたくもなる俺の心情を察して欲しいぜ。

揺らめきの灯――即ち松明の明かりを頼りに、ゆっくりと奥へと進む。

洞窟の横幅はちょうど大人二人と半分位。縦は二メートル程かな？まあまあゆとりがある。

奥行きは不明。でも意外と深さがありそうな感じがする。

先頭に日蔭氏とチンパン、後ろに俺という逆三角の陣形で洞窟の一本道を歩く。

「道が分かれていなければいいのですが……。」

日蔭氏はそうつぶやきやんわりと笑い歩く。

「あれ？ここ、たしか箱が落ちてた場所か？」

少し広がる道に箱が置かれた跡がある。辺りを見渡すと何やら横穴らしきモノが……。

「あの横穴イイ感じであやしい」ちよつと行こう」

チンパンはノリノリでズンズンと進む。

「ちよつ、ちよつと、大丈夫かよ……。」

若干腰が引ける俺。

だってよお、箱の中にナイフと一緒に《干からびたち……》が入ってたって事は、ち……がないミイラとか出てくる可能性もアリって事じゃね？

あゝっ！想像したくねゝのに勝手にのーみそがフルスペックハイビジョンっ状態！！怖え、マジ超怖えんですけどっ！

「うわっ、見て、ひかつちい！すごいのみつけたよっ」

チンパンは興奮気味で日蔭氏に手招きをする。

「何でしょう？ノブヨシさんっ、行きましようっ」

日蔭氏よ、はにかみ全開でまだどさくさに紛れて手を繋ぐなっちゅーのっ！！

クソッ！でも洞窟ん中怖えから、不本意だが手を離すのはやめてやるよ。

「ノブヨシさん……」

乙女チックに瞳をキラキラさせても所詮ナリは枯れ枝的なオツサンだから勿論可愛さゼロ……っ！完璧マイナス。

先刻のちよつとした尊敬心を返して欲しくなっただぜ……。

「ほら、これっ」

指差すチンパンの先を点々と辿ると、

「ちよいちよいちよい！これってまさか……！」

背中が凍り付きそうな緊張感に襲われ、思わず生唾を飲み込んだ。

「パイナポー、畑じゃない事だけは確かだな、すごい数だなあ、この手榴弾……」

チンパンは木箱の中に山積み、そのパイナポー……ノンノンッ！しゅっ、手榴弾！を一個手に持ち、

「おっ、お前何手に持つてんだよ……マジ危ねーだろっ！」

あわわわっ！と慌てる俺に、

「抜きたい、このピン、抜いてポイツ、ドッカーンッ！やつふいっ！……てやりたいなあっ」

オオイっ！アホかつ！

好奇心旺盛にも程があるだろっ！！

つかドッカーンッてよー！

洞窟ぶっ潰して生き埋めにでもなりたいのかっ！

「冗談じゃねーぞ！俺はお前と心中なんて絶対ゴメンだ！！さあ！その物騒なモノをそつと元の場所に戻しておけ！」

俺はチンパンにビシリと指をさして声を上げた。

「やれやれまったく、せつかくスリルを味わうチャンスなのに…。ツマラン男よのお…ミラクルハゲリンコフ。」

「残念そうな顔で、何故シャツの胸の中に隠すんだよ！」

「護身用だよ、ほらさ私武器ナシだもん。いざって時のためにさ」

お前に関してはいざって時は、多分永久に訪れないと思うよ。

つか、お前ならマキユポくらいなら普通に素手で倒せるポテンシャルの持ち主だと俺は睨んでいる。

「そうだ、これ、帰りに浜辺へ幾つか持って帰りましょう。爆発音で人がこの島に生存している事に気付いて貰えるかもしれないし。」

日蔭氏はチンパンに笑いかけた。

「ド派手に花火を打ち上げたいねっ」

ずいぶんとクレイジーな花火だよな、全く。

でも危険とはいえ、確かに日蔭氏の提案は悪くないかもな…。

その時、

「アハカ ピタ ガヤッ トリスタ ピヤッ！」

叫び声の主は、

「あぁっ！お前！昨日の子供っ！」

思わず声を上げたら、

「カハイ ナルキ タピエパ ピヤッ！」

なんか棒キレをギョツと握り持って怒り狂ってる。

「日蔭さん、あの子なんて言ってるの!？」

俺の問い掛けに

「ハゲを見たら呪われる…と、あとハゲは悪魔だ…」

「なんだとゴラアアア！」

俺は子供に吠えた。

「ピヤ！！ピヤ！！ツルツピヤーーーーーッ！」

泣き叫び、子供は洞窟の更に奥へと逃げていった。

「ツルツピヤ…とはですね、斑^{まだら}ハゲという…」

「許さん！！あのガキ！追うぞ！」

俺達は走り出した。

「ツルツピヤ♪これは覚えやすいなあ。あんたのミドルネームはツルツピヤに決定だな♪」

うつせーチンパン！

第12話・ツルツピヤて！まだらハゲて！どんだけ失礼な事言われてんだよ！

しかしこの暗闇の中、明かりもナシであの子供、よく動き回れるよな…

きつと、この島の地形や洞窟の構造を熟知していると俺は読んだ。

という事は、あの子供、結構な時間をこの島で過ごしていると言
う事に繋がるんじゃないかな…

洞窟奥に向かい、2〜3分走っただろうか？

「おほっ、なんか急に広い場所っ。」

洞窟の最奥にたどり着くと、急に辺りが広い部屋…まるで集会
場みたいな感じだろうか？

多分大人が二十人程いても窮屈にはならないゆとりのあるスぺ
ス。

「子供、いませんね…」

日蔭氏は辺りを見回しつぶやいた。

「おかしいな…、ここまで横道はなかったはずなんだけど」

「ねえねえ、なに、あの変なシートっ」

チンパンは左側の深緑色の山なりになったシートを指差す。チン
パンの声に小さくシートが揺れ動く。

うん、すっげーわかりやすいな……。

「間違いなくあそこに隠れてるな。日蔭さん、ちょっと現地語で俺
達は敵じゃないって呼びかけてくれない？」

「わかりました。」

日蔭氏は頷くと、

「タヤキ パヤク アシパ ナン タタピ
(大丈夫、怖がらないで下さい)」
穏やかな声でシートに向かい呼びかける。

「……………」

俺とチンパンはじつと事の成り行きを見つめる。

「タヤキ パヤク アシパ ナン チャポネタタピ アトパラ ノ
シ ツルツ ピヤ

(斑ハゲは日本人で私の恋人ですから、怖くないですから大丈夫ですよ)」

今、斑^{まだら}ハゲって言ったな……。

日蔭氏の言葉にごそごとシートが動く。

「チャポネ…タタピ…？(日本人の…恋人?)」

シートからぴよこんと頭を出して子供が俺を凝視した。

「アン チャポネタタピ(そう、日本人の恋人です)」

日蔭氏はニコツと微笑む。

「ねえ、何？チャポネタタピって。」

チンパンの問い掛けに日蔭氏は

「日本人の友達と言う意味です。簡単に言うと、私達はあなたの味方だと言う事をあの子に伝えました。」

「ツルツ ピヤ…」

(まだらハゲ…)」

俺を見て異様に怯える子供。何、その失礼な態度。

「…てかさ、もしかしてハゲが怖いんじゃない？」

チンパンの問い掛けに、

「ツルンゲピヤとの戦争の際に、ハゲは悪魔だ、ハゲをみたら悪人

と思えと教わった人もたくさんいるみたいですからね。」

日蔭氏がそう説明すると俺の頭皮を数秒ガン見して吹き出すチンパン。

「何故ハゲを目の敵にするんだよ！納得いかねーぞ！！」

「ツルンゲピヤの男達は皆ハゲていたらしいんですよ。」

「なるほど、納得納得。」

チンパンは腕組みして頷く。

なるほど…だからナヤパサを狙ったのか…。

んで返り討ちにあって滅ぼされたって…あ、なんだろ…この言いようのない悲しさは…。

日蔭氏は子供に歩み寄ると、

「大丈夫、もう怖くないですから。」

優しい声で子供の頭を撫でた。

あ、勿論現地の言葉で話しているぞ。

何故俺が急に現地語を解読できるのかと？

それはね、物事をスムーズに進める為に全員の言語の壁を神様が壊したからです。

（あのね、現地語めんどいだけだろ？とかそうゆう事は言っちゃいけないよ）

「名前、なんて言うの？何歳？」

チンパンの問い掛けに、

「セシル…何歳、わからない。」

子供（女兒）は小さな声でつぶやいた。

「いつからこの島に？」

日蔭氏の問い掛けに

「…パパ、ここで戦争…、してた。」

「は？マジか…？」

俺はチンパンと日蔭氏と顔を合わせて驚いた。

「つーことは、単純に見積もっても、この子は間違いなく十六年以上は生きてる計算になる。」

それにしても、ナリは十歳くらいにしか見えなくらいのガリガリちびっこ幼児体型……。

「ずっと一人で島に？」

「パパ、ママ、戦争で死んだ。気付いたら誰もいなくなつて、私人ぼっちになった。」

セシルは俯きつぶやいた。

「友達、いた。マヤカって言う名前のマキュポ。でも、姿ない……どこかに行ってしまった。」

あ……、それってさ。

俺は日蔭氏を見つめた。

日蔭氏はばつの悪そうな顔でさく目だけで頷いた。

「ご、ごめん……お前の友達は……あの鍋と干し肉になって木に干されている。」

「お腹、すいた。昨日盗み食いしたスープ、おいしかったなあ。マヤカにも食べさせてあげたかった……。」

小さく微笑むセシルを見つめて嫌な汗が……。

……いや、ごめん、それは無理な話だよ。

だって、その鍋自体がマヤカなんだもん……。

勿論そんな事は口が裂けても言えないな……。

「とにかく、これからは俺達と一緒に……。」

「うわあああつ！何これっ！すっごーいっ！」

チンパンがいつの間にか、セシルがいたシートの中を覗いて雄叫んだ。

第13話・最奥に眠りし何かに挑む。はいはい、どーせ俺は腐ったクズのヘタレ

デンジャラスチンパンの喜び具合からして、危険物がシートの中に潜んでいる事は間違いないだろう…。

もうやだ。

ぶっちゃけシート中なんて見たくねーし。

そう思ってみても、やっぱり見なきゃいけない、そしてチンパンの暴走を止めなくちゃいけないような人として――いや、生きて日本に帰還しなきゃいけないと言う使命感に否応なしに背中を押されて、俺はシートに歩み寄る。

「……あは？」

シートの中身を凝視して思わず間の抜けた声が出る。

「…なに？これ。」

とりあえず目を二、三度擦って再度ソレを見つめて指さし、

「……ねえ、何これ？」

日蔭氏とセシルを見つめる。

「こ、これはっ！」

驚きの中に何やら不吉な顔色を伺わせる日蔭氏。

「あー、それ、私がずっと枕に使ってたやつだ。でも最近いきなりカチカチになってしまったから、シートかぶせてしまっておいた。」

普通にそう答えるセシルをみて、コイツも相当イカれてるなとふと悟る……。

「モスラだ…、これ、間違いなくモスラの幼虫だ…」じやなきゃ、ナウ×カにでてくるあの幼虫だっ！」

オウムて幼虫か…？

いやいやいや！そうじゃなくてよーっつ！…！！

シートの中には薄茶色い体長一メートル程の、なんかチョココロネを思い出すかのような、何かの幼虫が……。

「……………」

日蔭氏は険しい顔で幼虫に歩み寄ると、そっとそれに触れる。

「何？ひかつち、コイツヤバイの？」

何かを察したチンパンは日蔭氏に問い掛ける。

「…これは、ルギヤツサと言うナヤパサに壊滅的被害をもたらす凶悪害虫の幼虫……いや、もうすでに蛹みづむすになっています！」

日蔭氏はナイフを鞘から抜き、蛹に向かい振り下ろす。

ガキーンンッ！！

「クッ……！！」

金属を弾く音と、日蔭氏の苦々しい呻きが洞窟にこだまする。

「な、ナイフが刺さらないって！！何、何っ！コイツ！？」

「マズイです、ルギヤツサが孵化したら、ナヤパサ畑が滅びてしまっ……」

苦渋の表情で日蔭氏は再度蛹にナイフを振り下ろす。

「ど、どうゆう事だよっ！」

いきなりの急展開に俺は軽いパニック。

「ルギヤツサは、太古の昔からこのトリスタの地の邪神として恐れ

られてきた凶悪な蛾虫です。」

日蔭氏は、何度となくナイフを蛹に突き立てるが、その殻は尋常じゃない強度で傷ひとつつかない。

「私がこの地に訪れたあの日、ナヤパサ畑に有毒な病気をばらまいたのも、このルギヤツサなのです！」

「何だつて!？」

俺は蛹を凝視して叫ぶ。

「じゃあ、コイツが孵化したら……」

チンパン――相原はつぶやく。

「間違いなくナヤパサ畑に向かい飛ぶでしょう。ルギヤツサが撒き散らす鱗紛は、ナヤパサを病気にして枯らしてしまうんです！」

ガキンツツ!!

と響き渡る音の後、ボキリと折れたナイフを握りしめて日蔭氏は、ガクリと両膝を落とした。

「神の花…ナヤパサ無くなる…、この国滅ぶ……。パパ、ママ、たくさんの人、命かけて戦った…全部ムダ…」

セシルは顔を両手で覆い隠し肩を震わせた。

「!!こっとなつたら、アレで洞窟ごとコイツを吹っ飛ばしちゃうっつ！」

チンパンは胸元から手榴弾を取り出し、漆黒の瞳に強い光を込める。

「そんな事したら！俺達まで洞窟に埋まっちゃうだろうが!!」

「じゃあどうすんだよ！このままコイツが孵化してナヤパサが！トリスタが滅ぶのを黙って指くわえて見てろってか!？」

相原は怒声と共に俺の胸ぐらを掴み締め上げる。

赤みがかった茶色いセミロング、耳辺りまで長く斜めに分けられた前髪から覗かせる眼光は切れ長く少し吊り上がり、何だか胸ぐらを掴まれているにも関わらず、頭ん中で（コイツこうして見ると中々イイ女だ）なんてちよっと思っってしまった……。こんな時まで俺はバカな事を考えてる。

いや、こんな時だからこそ思考は全然違う場所に飛んでしまうのかもな。

「……だつてよお、命のほうが大事だろ……。」

呟いた瞬間……

俺の体は頬の衝撃と共に数メートル先の壁に吹き飛んだ。

かろうじて受け身を取ったが、壁に叩きつけられた衝撃で頭が真っ白になった。

「ノブヨシさんっ！」

駆け寄ろうとする日蔭氏に、

「ひかつち！そんな腐ったクズは放置！！」

さっきの場所から手榴弾全部運んぶよ！」

相原は二人にカモンと手招きをして走る。

日蔭氏は後ろ髪を引かれながらもセシルと共に暗闇へと消えた。

「……………」

ははは、腐ったクズだつてさ。

そうだよ。俺なんてどーせ自分の事で精一杯なへたれ人間だよ。

仕方ねーじゃん。

んなもん。

命かけて何かを守るなんて、俺には、いや普通の人間には無理な話だろ？

たかが花ごときで国が滅ぶなんて、そんなバカな話があるかよ。

先刻のセシルの茫然とした顔が浮かぶ。

『神の花…ナヤパサ無くなる…、この国滅ぶ……。パパ、ママ、たくさんの人、命かけて戦った…全部ムダ…』

たかが花ごときで……

クソッ、クソッ、クソッ……！！

俺は拳で地面を叩く。

徐々に力がこもる。

クソッ！クソッ！

情けない…。

行動する事なく一人で泣く事しかできない惨めさ……。

ルギヤツサの蛹を見つめる。小さく脈動するその薄茶色い巨大チヨココロネ。

「ん……？なんだ、あれ………？」
ルギヤツサの下に何かある。

俺は痛み軋む体を起こしてルギヤツサに近付き、その砂の下をまさぐる。

「……………これって。」

俺はなけなしの力を振り絞りルギヤツサを押して横にずらした。

ルギヤツサの下には、収納式の鉄の取っ手。

砂を全て払いのけると、一メートル四方の扉。

取っ手を引っ張り扉を引っ張り開ける。

「お、重え……。俺の力だけじゃ無理かつ……！」

クソッ！俺はどこまでも非力だなっ！

全くもって自分にム力ついて扉を叩くと、手榴弾を抱えて息を切らせながら走り三人が……。

「……………」

俺は唇を噛み締めて黙り込む。

「何やって……………!!」

言葉を止めて俺がしゃがみ込む足元を見て、

「……………見つけたじゃん、生き延びる可能性。」

察しのいい相原は極上の笑みを浮かべて俺に顎を突き出し鼻を鳴らす。

「開かねーから、この先はどうなってるかわかんねーぞ。」

俺は小さく笑った。

「大丈夫だよ。私らにはトリスタの、ナヤパサの救世主がついてるんだから。」

相原は日蔭氏にウィンクして笑う。

そうだな…。

その通りだ。

相原が言うんだから、間違いない。

「日蔭さん、扉を開けるの、手伝って。」

俺は日蔭氏に視線を投げる。

「愛の共同作業ですね♪」

「そこは全力で否定します!!」

日蔭氏と俺の掛け合いに相原はあっはっ♪と笑い、ルギヤツサの周りに手榴弾をばらまく。

「あの二人、男同士なのに恋人。おもしろいな」
セシルは相原に笑いかける。

「恋人じゃねーよっ!」

間髪入れず否定する俺に、

「え、だってさっきテルがまだらハゲ恋人って言ったぞ。」

「何だと!ゴラアア!やっぱりさっきいい加減な通訳しやがったな!」

俺は日蔭氏を睨み吠える。

「テヘっ♪」

舌をぺろりと出しはにかむオッサン!いい加減にしろや!!

吠えた瞬間、重い扉がギーッと軋み、上に持ち上がる。

松明で下を照らすと、鉄の梯子が見え、風を感じた火がゆらゆらと揺れた。どうやら下に空気のある道があるみたいだ。

俺は相原を見つめ、瞳に力を込めて頷く。

「セシル、ひかっちと先に降りてな。」

相原はセシルを見つめて扉を指差す。

焦げ茶色の瞳を見開き、しっかりと頷きこちらに駆け寄るセシルと日蔭氏は鉄の梯子を降りていく。

下に到達し、

「奥に道が繋がっています。」

足元から日蔭氏の声がこだまする。

俺は相原を見つめる。

「さあ、ドカンと花火を打ち上げようか」

相原は俺の隣でゾクリとする程に鋭くも美しき眼光を放ち、手榴弾のピンに指をかけて、

「くたばりやがれ、悪しき神よっ」

それを引き抜き、ルギヤツサに向かい投げ放った。

二人で重い扉にぶら下がり一気にそれを閉め、下がどれだけの距離かはわからないけど、躊躇う事なく飛び降りた。

扉から手を離す間に、俺の唇に、相原の唇が触れた……ような気がただけかな？

暗いからよくわからないけど……。

なんか、ほんのりと温かい柔らかさを感じた。

第14話・グッバイ洞窟よ…。ああ、俺は本当に無事に日本に帰れるのか…？

ひゅーつと落下する事ほんのゼロコンマ数秒。

距離にしたら多分二メートルない位の高さだろう。

スタツ・・・と格好よく着地なんて運動神経のない俺には叶わぬ夢

…。

「グヘアアッ！！」

受け身を取れずに背中を強打した俺の腹の上に相原の両足がメリ込む。

「あ、悪い、悪い♪暗いからわかんなかった。」

涼し気に笑うクソチンパン！

「オメー絶対わざとだろっ！！！」

そう叫んだ瞬間・・・

ドオオオオンッ！！

と頭上からもの凄い音と共に地面がグラッと酷く揺れる。

「！！！！」

相原は振動でよろめき倒れ、地面にはいつくばる俺に覆いかぶさる。

真っ暗でよくわかんない状況。

しかしパラパラと頭上から降ってくる小石や砂、土で依然危険が続いている事は否めない。

否めないんだけど……

何故だか体が動かない。

暗闇に少し慣れたせい、俺に被さる相原の輪郭がつつすらと見える。

顔の近くにかかる俺のものではない、少し熱を帯びた吐息……。

「相は……！」

突如として俺の言葉を遮る、生暖かくて柔らかな唇の感触……。

先刻飛び降りた時、柔らかなモノに触れた時とは違う、濃厚で甘美な……

思考が麻痺する。

同時に何かが弾けたかのように、俺は相原の背中をまさぐる。

ただ、何を考える事もなく、暗闇の中で……

きつと、人は極限常態に陥ると遺伝子を遺したいと言う生物的本能が咄嗟に作用するのだろうか……。

俺は覆いかぶさるそのしなやかな身体に手を這わす……

その時、

「ちびつこの前でハードゲイな行為は戴けないねー」マズイよ、セシルがどん引きしてるよっ」

近づく松明の明かりと共にげらげらと笑う

「あ、あい……は……ら？」

思考がこんがらがる。

刹那、身体中の毛穴という毛穴から、滝のような汗が噴出する。しかし顔は多分、ドラ○もんより青いよ…ええ、間違いありませんね。

見ちゃいけない
見ちゃいけない
見ちゃいけない
見ちゃいけない……

覆いかぶさる物体を決して見ちゃいけないっ！！

俺の中の清らかな俺が激しく警鐘を鳴らす。
しかし、

「ノ、ノブヨシさん……結構激しいのね」
降り注ぐ悪魔の旋律……す、すなわち

「ノーーーーーーーッッ！！！！」

日陰輝明っつ！！！！

スーパーイリユージョンッ！！

「○」%「+」

もはや言葉にならない言葉を発するしかないでしょーーがつ！！！！

バカバカバカバカーーーーーッッ！！！！
俺の遺伝子！

ナニヲトチクルッテンダヨッ！！！！！！

オッサンと、オッサンと抱き合いキスしてしまったあああああ

！！

しかも、結構な勢いでっ！！！！

「ナヤ カラタ ウトパタ……………」

セシルの氷属性的なトドメのひと刺し・・・

はい、心肺停止……………お願い、もう誰も俺を蘇生させないで下さい。

「逝っちゃダメ！人工呼吸をつ！」

白目を剥いて逝きかけた俺にオッサンの追撃！正気を取り戻す為、自ら緊急蘇生&避難避難避難ツツ！！

「あ、やべっ！上崩れ落ちるぞっ！みんなダーツシュ……………」

チンパンはセシルの手を引き走る。

「さあ、ノブヨシさん、私たちも……………」

「いやあああああああーッッ！！！！！！」

とりあえず危険回避の為、チンパンへ向かいBダッシュ！！

ハテナブロック叩いてデカキノコをゲットしたら、間違いなく踏ん付けてやるっ！俺の唇を奪ったあのオッサン！

お前がオッサンの唇を求めたとか誰だっ！悍ましい事ほざいた奴！！

違う違う違う！！

だってっ！俺は絶対に相原だと思ったんだも……………んっ！！

まさかオッサンと相原がイリュージョン的に入れ替わってるなんて、あの状況じゃ考えられるワケねーだろっ！！

あ、やべ…涙出てきた。ちきしょ…っ！

ナミエ…っ！ナミエ…っ！ちよつとでも相原に対して浮つく心を見せた俺を許してくれ…っ！

俺はやっぱりお前だけだ！お前だけを愛してるっっ！！

心の中でシャウトして、俺は走った。

道は結構な坂道、しかも上り坂。

心臓痛えーっ！足が纏れそうになるけど、崩落した洞窟でオダブツはいやだっ！！！！

「あ、光だっ！出口だぞっ！！」

雄叫ぶチンパン。

「ぬおおお…っ！！」

ガクガクする足に鞭打ち走る走る！

眩しい光が強さを増し、洞窟のゴールを告げる。

やった！これでまたひとつ危機を回避！！

光を見つめて安息感が身体を駆け巡る。

俺は光に身体を包まれて両手を高らかに上げ、まるで覇者の如くゴールテープを切るかのようにガッツポーズ！

って、あれ？？？

地面がないよ？？？

「え？」

見渡す刹那…

「うわあああああああああああああ！！！！」

身体は万有引力に抵抗の「手の字」もなく、真っ逆さまに、

「ゴールじゃなくて滝壺かよーーーーーッ!!!」

「いやっふっいつっ」

「イエっイっっ」

「いやあぁんっ」

オオイ! オッサン! スカートはいてないのにスカート押さえポーズ
すんぢゃねーっ!!

そんな俺の叫びも虚しく…

ひたすら引力に導かれて落下した。。

第15話・生きてるだけでほにゃらら〜。

あ、俺また夢見てる。

見渡す辺り一面、まるで虹のように色とりどりの花がどこまでも咲き誇り、柔らかな陽射しと心地良い風に揺れている。

ああ、綺麗だなあ…。

こんな景色、今まで見たことがない。

俺はゆっくりと虹色の絨毯を歩く。

あ、青い鳥だ！

感嘆し思わず手を伸ばすと俺の周りをくると一周羽ばたき、「こっちについてきて」と語りかけるかのように鳴き、俺を導く。

青い鳥について歩く足を速めると、花畑の中で誰かが唄いながら花を摘んでいた。

「
♪　♪　♪
」

あ、あのウエディングの定番曲だ……。

俺は歩く足をゆっくりと進めて歌声に耳を傾ける。

透き通る少し高めの歌声の主を見つめる。

まばゆいばかりの純白のドレスに、オーガンジーのロングベール。

あ、花嫁だ。

そう思ったら俺はいつの間にもやらタキシード姿。

花嫁の横にそつと座り、花を摘み歌うその声に耳を傾ける。

とても静かだけど、温かく幸せに満ち足りた二人だけの世界。

俺は花嫁のベールをそつと捲る。

歌声が止まり静けさが一層深まる。

「……………」

「……………」

重ねた唇から零れ落ちる甘い吐息のハーモニー。

肩と袖のないドレス。

長くて白いシルクのような光沢のある手袋を花嫁から外し、俺は手袋に負けず劣らずの白く細い腕にそつと唇で触れた。

花嫁の腕から上へゆつくりと唇を這わす。

肩から鎖骨へと……………」

そして胸元へと……………」

花嫁を抱き寄せて、俺は唇でその美しい肌に陶醉する。

ほんの少し頭上から、憂いを、そして恥ずかしさを含んだような息が漏れる。

指を花嫁のドレスの背中のジッパーに……………」

純白のドレスの胸元が緩み……………」

目の前には白く透き通る柔らかな……………」

「むふふん…」

夢心地の柔らかさに思わず漏れた自分の声で目が覚めた……。

むふふん？

顔に柔らかな感触。

あれ？まだ夢は続いているのか…？

おもむろにその柔らかなモノに、手で触れてみる。
もにゅもにゅ…

嗚呼…素晴らしきかな、この触り心地。
どうか夢なら覚めないで欲しい。

無我夢中でその柔らかさをまさぐり堪能する。
「あ、う…ん…」
零れる吐息は少し高めの透き通る声。

俺の理性をいとも簡単に吹っ飛ばす破壊力……

寝ぼけた頭であるに関わらず躊躇なくシャツの中に両腕を忍ばせて、じかにそれに触れ、俺は快楽に身を委ねる。

もにゅもにゅ……。

「あ…、っん…」

ああ、やばい。久々マジで味わうこの感触。

♪やめられない止まらないっ♪

何故かしら頭の中に流れるあのスナック菓子のCMソング。

もにゅもにゅ…

もにゅもにゅ…

…夢にしちゃあ、リアルな感触…。

「ああんっ♪あ、あ」

声もやけにリアルだ。

「……………」

そつと目を開けてみる。

ふっ、どうせ目の前にはオッサンかエイリアン（タコ）かとか理不尽なオチだろう…よ????

「え???」

思わず漏れるマヌケな声は勿論俺のモノだ。

目の前にはちよつと水に透けた白いシャツ。

俺の両手は下からそのシャツの中……。

目線のちよつと上には目を閉じながらも上気し艶めく

「あ、あい…はら？」

の顔…。

えーと、えーと……

洞窟でドカン！で、ダッシュでゴールでひゅーっどと滝壺に…

「落下して…、あ」

目を開いた相原とがつつり視線が合わさった。

「続きい…しないのぉ？」

潤む瞳と誘う言葉。

「え？」

「今ならぁ、ひかつちも、セシルも食料調達でいないよぉ……………」

マ、マジですか…？

きょんとする俺の視界に近付く相原の顔。

そして、重なる唇の温度…………。

唇で俺の唇を甘噛みしながら相原は、

「もうヤバイ…。スリル味わい過ぎてのこの高揚感…我慢できない……………」

エロスイッチ大全開！

どーする？俺よ。

いやいやだつてさ、甘い誘惑の裏にはデンジャラスが待ってますつてのがお約束だろ？

「あ……………」

やめて、相原。今そこ触ったら非常にマズイ。

「うふん♪準備万端♪」

ちよ、ちよ、ちよーっ！！！！！！

「あふう…超スツキリい…佐々木、ナイスバッティング。」

隣で若干ぐったりと寝そべり、瞳を潤ませて笑みを浮かべる相原。
「…いやいや、相原も中々…。」

何ゆってんだ？俺。

「…さつきさあ…。」

「んー？」

「幼虫のところで扉見つけたあんたの顔、」

「……。」

「中々男前だった。」

相原は嬉しそうに笑う。

「ど、どーも。」

何となく照れ臭くて、ぶっきらぼうに答える俺を見て、相原はくすくすと笑う。

「ちよつとは遅しくなったんじゃない？ツルツピヤ。」

「まだらハゲじゃねーし。…ちよつと薄いだけだし。」

とりあえず鼻を鳴らしてみるが、顔はなんだか緩んでる感じが…。

「私達、トリスタの危機を救ったんだね。」

相原は清々しい笑顔で青い空を見上げた。

「表だつて歴史には刻まれねーけど、とりあえず守るもんは守れたな。」

俺も笑って空を扇いだ。

「ナヤパサの花って、どんな花なんだろうね。」

「さあな…でも神の花だからそりゃ綺麗なんじゃねーか？」

「楽しみだ♪あのまま飛行機が落ちる事なくナヤパサ畑に着いてたら、こんな花の事を考えてワクワクする事はなかっただろうね。」

「確かに…。」

「セシルの存在にも幼虫の存在にも気付かなかった。」

「ああ、気付けなかったな。」

「…世の中にはさ、やっぱり損はないなと私は思うよ。」
相原は笑う。

「オッサンに擦り寄られる事は損だと思うが…」

「あははっ、ひかっちは本当面白いよ。」

「俺は全っ然笑えねーし…。」

「でも良き友だ。」

「……まあな。」

「セシルもいい子だしね♪」

「…そこは微妙。」

「ぷっ…♪あはははっ」

「ふっ…、くっくっくっ…あっははははっ」

なんか、いろいろと思い出したら有り得ない事ばかりで、でもそれを何だかんだと喚きながらも乗り越えちまったもんだから、腹の底から笑えた。

言葉にする事は難しいこの高揚感…。

寝そべったまま青空に向かい二人で大口開けてひたすらげらげら笑った。

《生きてるだけでまるもうけ》

頭ん中であの芸人さんの言葉が浮かんた。
なんか妙に納得した。

第16話・いくら考えても拭えない矛盾感に何だか胸がザワザワと…。嗚呼、嫌

あの有名な海賊映画のキャプテン・ジャック・スパロウは、無人島に一人置き去りにされた時、ウミガメにロープをかけて背中に乗り島を脱出したと嘘をついた。

本当は砂浜にある貯蔵蔵のラム酒を呑みながら定期的に通り掛かる船をまったりと待っていた。

同じように無人島に再度置き去りにされ、それに気付いたヒロインはジャック船長をしこたま酔わせてぐっすりと眠らせた後、貯蔵蔵の残りの酒を全て燃やしてSOSのサインを送った。

ルギヤツサのいた洞窟を手榴弾でド派手にぶっ飛ばしたのに……。

あれから青空と星空を三回みた……即ち三日が過ぎたのに、助けの『たの字』もなく時間は非常にゆったりと流れる。

ザザァー…とひねもすのたりと波打つ青い海。

青い空にはふかふかと雲が浮かび、ゆったりとだが、風に流されてその形をどんどん変えていく。

誰が言ったんだっけなあ…。

『どんなにすごいカメラでも同じ空は二度と写せない』と。

地球ってのは生きてんだなあ…。

自分で回って、太陽の周りも回って…。

行動時間がのんびりとは言え、考えてみりゃあ忙しいやつだな、地球ってやつは。

「イチロー、バッターボックスへ！さあ、今日もヒットが出るかつ！？」

相原は俺の後ろで棒キレでイチローの真似をしながら素振りしてゐる。

島へ流れ尽き、日に一度はこうしてイチロー素振りを披露してるけど、いい加減飽きねーのかな？と思う。

つか、椰子のカラーをノックして俺にぶつけるの、マジでヤメロ。かなり痛えんだぞゴラアア！

日蔭氏はというと、今セシルと共に島の全貌を把握する事を目的とする散策へ。

最近日蔭氏は俺よりセシルと行動を取る事が多い。きっと母性本能（？）が揺さぶられるんだろう。

何かとセシルの世話を妬きたがるが、セシルはなりはちびっこだが、歳は多分結構な大人なんだよな…。

かれこれ15年以上この島で一人暮らししてるから、メンタルは尋常じゃないくらい逞しい。

多分このメンバーの中で今一番冷静に物事を言うのはセシルだと俺は思う。

でもさ、なんかひっかかる。

セシルが洞窟で言った言葉。

『パパ、ママ、戦争で死んだ。気付いたら誰もいなくなって、私一

人ぼつちになった』

気がついたら誰もいなくなってたってどうゆう事なんだ？

死んだ的なニュアンスにはとても感じられない。

セシルを置いて、生き残りの人間が忽然と消えたという感じに受け取れる。

どうやって島を脱出したんだろう…。

やっぱり船かなあ…？

つか、何でちびっこだったはずのセシルを島に置き去りにしたんだろう…。

死んだと思われたのか…？ いやいや、そんな事は普通に確認すりやわかる事だろ？

「な〜んかひつかかるんだよなあ…。」

水平線をぼんやり眺めて小さく呟くと、

「かああ〜つつつ（喝）！！！！」

右肩にべっしーんっ！と衝撃的な痛みがっ。

「いっつてええええー！！！！！！！！！！」

痛みに悶えながら絶叫する俺を見て、

「エロチックな妄想に耽り独り言とは、ひっじょ〜にキモい！！！！」

「今のつぶやきのどこにエロチックさが潜んでたんだヨツ！！」

「ん〜、…何となくそうゆう空気を感じたから、何となく大沢親分になってみた♪」

「大沢親分も張本さんも「喝」は言っても棒キレで人は殴らねーし！！」

「じゃあ、山寺の和尚と小坊主って設定で♪私、志村けんで佐々木

は上島竜平で。」

「なんでいきなり即興でシチュエーションコントさせられなきゃいけないんだよ!!」

「暇だから」

あつはと笑うチンパン相原…。いくら暇だからって上島竜平はごめんだね!

「つーかよ、お前はと思う?」

「ん、何が?」

「セシルの事だよ…。」

「セシルがどうかしたのか?」

「なんで、あいつこの島にひとり取り残されたんだろう?」

「死んだと間違えられたんじゃない?」

「いや、普通はさ、死んだかどうかちゃんと確認するだろ? つーかそもそも何でちびっこが戦地なんかについて来るかも疑問だよ。」

「両親以外に身寄りがなかったんじゃない?」

「それなら近所の人にも面倒みて貰えるはずだろ? 何てったって、ナヤパサを守る為の国同士の戦いなんだし。」

「ま、確かに…。」

「ひょっとしてさ、セシルをここにわざと置き去りにした…とか?」

「そうしなきゃいけない理由は?」

「……わかんねえ…。」

「実はセシルは《封印された神》へのいけにえだったとか?」

そんな相原の言葉に、

「お前、なんでそんなに膨らませて不吉な事に結び付けたよ…」

「暇だから仕方ないじゃん! ああゝっ!! 暇っ! 暇っ!! 降っこ
おおいっ! デンジャラスハプニングよおおっ!!」

雨乞いするみたいに天を仰ぐチンパン！マジでヤメロ！！

「なんか、嫌な予感がする…。」
変な胸騒ぎがする。

「ノブヨシさあああんっ！かざねちゃああんっ！！」
山ん中から日蔭氏の声。やけに慌ててる、なんか様子が変だ。

「おっほっほ、ハプニングな予感♪」
おじ。る丸のようにまったり口調でつぶやくチンパンに、更に胸騒ぎが酷くなった。

「セシルがつ！セシルがつ！」

「「セシルが！？」」

第17話・セシルはいずこへ？三人揃えば何とやら・・・

「セシルが消えたって、どうゆうこと？」

俺は日蔭氏を凝視した。

「滝壺の近くで、ちょっとお花摘み（即ちトイレ）に行っている間に、いなくなってしまったんです。」

「迷子」？」

ボケたチンパンに、

「んなワケねーだろ。十五年以上ここにひとり住んで、島を熟知する人間が迷子なんて有り得ねーし。」

「呼びかけながらあちこち搜したんですが、どこにもいないみたいなんです。」

日蔭氏は心配でオロオロと落ち着かない。

「やっぱり何かおかしくねーか？」

俺は相原に視線を投げた。

「考え過ぎじゃない？」

「どういう事ですか…？」

日蔭氏はますます不安げに俺を見つめる。

俺は先刻の疑問を話して日蔭氏に意見を求める。

「…確かに…、変ですね。」

「ねえ、日蔭さん。トリスタ市民からセシルに当て嵌まるような話を聞いた記憶は？」

「…残念ながらそのような話は聞いた事がないですね…。」

「…神様から封印された島……………」

相原はぼつりとつぶやく。

「ねえ、もしもだよ。なんの根拠もないけど話しちゃうよ？」

「…なんだよ。」

俺は眉をひそめて相原を見つめる。

「実はさ、この島ってとんでもない秘密が隠されてるんじゃない？」

「秘密って？」

「んー、そりゃわかんないけど。」

「何だよ、言うほど意味ねーじゃんその話。」

「あのさ、この島からトリスタまでどれだけ距離があるかわかんないけど、三日前に派手に洞窟を吹っ飛ばしたじゃん？」

「ああ。」

「黒煙プラス土煙が結構しつかりと上がったじゃん？なのになんのアクションもない。」

「…それは俺も何となくひっかかってる。」

「もしかしてさ、トリスタ国民は実はこの島に人がいるって事に気付いているけど、知らんぷりしてるとかさ。」

相原の言葉に根拠はないけど、なんか妙に頷ける感じがした。

「この島には近寄っちゃダメとか。」

「そのダメな理由ってのがわかんねー。日蔭さん、この島の情報つてもつとないの？」

日蔭氏に尋ねる。

「うーん…。近寄ってはいけないという話は聞いた事ありませんね。」

唸る日蔭氏の反応を見て、謎は暗礁に乗り上げた。

「そんな事よりも早くセシルを捜さなくては！」

くねくねと見をよじりながら、足踏みしながら急かす日蔭氏に、

「そーだそーだっ！ウスラーのくせに生意気なっ！」

何だよチンパン、そのスネオ的あいつちな相槌は。

はいはい、ウスラーで結構。何とでもほざけ。

俺をバカにできるのも今のうち。

ナヤパサゲットでフッサフサになったら、頭イジルにイジレなくな

るからな。

はい、チンパンの愉しみをひとつ奪う愉しみゲットん。むっふっふ。

俺は心の中で鼻を鳴らしてほくそ笑んでやった。

「あ、佐々木…今ドエロい事妄想してたな。」

チンパンはけけけっと俺を指さし笑う。

「いやん、ノブヨシさんのえっちい。私をオカズに……」
「するわきゃねーよ！」

ここはきっぱり指さし物申す！！

「つーかふざけてねーで早く行くぞ！」
俺は歩きだす。

「なんか佐々木、若干たくましくなったね。」

相原はおっほっほと笑いながら日蔭氏と並び歩く。

「か弱いノブヨシさんもかわゆいですが、男らしいノブヨシさんもす・て・きっ。」

腕にしがみついてくる日蔭のオッサン。

「どさくさに紛れすぎだろっ！！」

ソッコーで振りほどいたのは言うまでもない。

なだらかな山の斜面。

漂流して五日となりやあ大体慣れて、別に怖いとも何とも思わなくなつた。

幸いにも危険生物に遭遇したのは、セシルの友達だったが食料になつて永眠したマキユポ1匹と、巨大チヨココロネ…じゃないや、ルギヤツサというでっけー蛾こなきの蛹さなぎだけ。

毒へびやら毒サソリやら猛獣なんてもんはいないから、案外平和な島だなあと。

食料は滝の下の川に川魚。海には海洋生物と飢えて困る事もないし。

チンパンにはゴンタラの醗酵果汁 - 即ち酒を与えておけばさほど凶暴ではない事もわかつたし、日蔭氏にはセシルを与えときゃあ俺に対してのセクハラ行為は和らぐし。

さほど困る事なく生活できてる。

しかしこんな状況に慣れて永住なんてのはごめんだから、さつさと島を出る方法を見つけなきゃいけない。

もしも、チンパンが言うようにこの島に誰も近付く事ができないなら、自力で島を出なきゃ愛しいナミエの元へと帰る事は不可能だからな。

ナミエ、俺頑張ってるから。

どうか心配しないで、泣かないでくれ。

あ、でもやっぱり悲しんでくれないとちょっと淋しいな…。

「ハゲリンコフ、エロテロリストっ！っ！
とりゃあーっ！と俺の後頭部にチンパンのチョップ炸裂！！

「エロテロリストはおめーだよっ！！俺は全っ然エロい妄想なんて
してねーしっ！」

吠える俺。

手を叩きげらげら笑うチンパン。
隣にはにかみオッサン。

何？このコントみたいなメンツ……。

「全くよおー……。」

俺は空を仰ぎ見てため息混じりに笑った。

セシルが消えた滝の周辺を探索すると、

「あれっ？あそこになんかあるぞ」

チンパンが滝壺の下に目を懲らし指をさす。

「あれは……」

日蔭氏は川に飛び込み滝壺へと泳ぐ。

「これ、私がセシルに作ってあげた髪飾りです！」

日蔭氏は花飾りを手に叫ぶ。

「まさか、溺れた……？」

相原は少し顔色を変えて川に飛び込み綺麗な平泳ぎで日蔭氏の元へ。
俺もとりあえず後へ続く。

何だよ…俺だって泳げるぞ。

犬かきだけど……

日蔭氏の元へたどり着き、立ち泳ぎで辺りを見渡す。セシルらし

き気配はない。

チンパンは滝壺の下に潜る。

「ぷはっ」

水面に顔を出して、

「滝壺の中に穴ぼこ発見！」

ワクワクしながら笑う。

「行きましよう。」

日蔭氏は俺に促すが、

「俺、潜れねーよ。」

「引っ張りますから息を止めていて下さい。」

「ちよっ、ちよっと待つ……!!」

言い終える前に俺の体は日蔭氏と共に水中に沈んだ。

第18話・相原探検隊とか隊長とか、好き放題言い過ぎじゃね？チンパン、お前

ああ…、なんかまた花畑……。奥にはゆるーりと流れる綺麗な川。
すげーなあ…辺り一面真っ白い花。
なんか雪が積もってるみたいだ。

あ、あれ！？うそっ！ おばあちゃんっだ！！

小さい頃大好きだった俺のおばあちゃんが、川の向こうで手招き
してる！

『おばああちゃあゝんっ！会いたかったよおおゝっ！！』
俺は川へ向かい駆け出す。

「ダメっ！！ノブヨシ君っ！！逝かないで！」
後ろから俺を呼ぶ声に足を止めて振り返る。

「ナ、ナ…ミエ…？」
振り返る視線の先には愛しきマイハニー！
体がわなわなと奮えて、足がこんがりそうになりながらも、俺
はナミエに向かい、走り出す。

「ナミ…！！！！！！」

目を開けたら、なんかかさついた唇のド、ドドドアーッッ
！！

「いぎひやめごっつ！！！！」
ワケわかんねえ悲鳴が口から漏れて、眼前のグロイドアップから

素早く逃亡！

「あんつつ、残念……。せっかく熱いマウス・トゥー・マウスでノブヨシさんをお助けしようと思ったのに……」

唇をつんと尖らせて残念そうにくねくねとはにかむオッサン、オッサン、オッサーーンッ！！

「危ね〜ッ！！！！どつちともギリセーフッ！！！！」

三途の川を渡るのも、オッサンと二度目の口づけも、どちらも同じレベルの激ヤバホラーだ。

危機回避できたのはやっぱりマイハニーのお陰！！ああ、離れていても心はひとつ…。

ありがとう、ナミエ。

愛してるよ。

心の中でしかと礼を述べて、とりあえず辺りを見渡し状況確認。

あは〜ん、なるほど、はいはいはい…。

俺は日蔭のオッサンの唐突で強引なデスダイビング――即ち素潜りのせいでお水をた〜っぷり飲んで溺死寸前だったってわけね…。

チンパンは、

「あんたマジ凄いよ！お腹押したら上島竜平みたいに、水ぴゅーって吐いたっ！しかも6回もっ！さすが佐々木！ねえっ！あの神業、もう一回やってくれよっ！」

異常に興奮して笑いまくる、大バカヤローのクソチンパンジー！！

俺は死にかけたんだぞ！

もういい。あんなサルった女は無視無視。

今は状況把握が先だ。

見渡す限りでは、ここは洞窟に間違いないだろうけど……

「つーか何？この洞窟、うつすら光ってないか？」

俺は立ち上がり蛍みたいな光を放つ壁らしき側面に触れる。

「うおっ！何だこりゃ！しつとりフツサリ柔かつ！」

中々心地良い肌触り。

「洞窟が光っているのは、ヒカリ苔こけの一種でしょう。」

日蔭氏は落ち着き払った様子でそう俺に説明した。

「へえー、ヒカリ苔か。なるほどな……。」

納得して頷くと、

「とりあえず、奥に進むぞ、相原隊長についてこいっ」

やっぱりお前が隊長なワケね。。。

俺はできれば日蔭氏を隊長に任命してーよ。

お前が先頭歩くと、ろくでもない事がほぼ200パーセントの確率で起こるから。

戦の陰に女あり……それとタメ張る言の葉。

《チンパン相原の陰にデンジャラスあり》

もーこれ、広辞苑に載せてもいいくらいだと俺は公言したいぜ。

光った洞窟をひた進む事数分。

一枚岩で出来た扉みたいなのにブチ当たる。

「開けーゴマッー！」

バカじゃね？チンパン、そりゃちよつと酷すぎるだろ……。

ベタもいいとこ、開くわけねーよ……。

辺りはこさぶい感じで静まり返る。

「うゝん…、開かないなあ…。」

チンパンは両足を軽く曲げて、

「せりやつー!!」

と馬場キック。

無論、開く気配無し。

「くぬう…、しぶといやつめ…こうなりや北斗百烈拳で粉碎してやる…。」

岩に向かい何故か敵意剥き出しで指をパキパキ鳴らす。

おいおい、お前、いつからケンシロウになっただんだよ……。

「つーか怪我するからマジやめろ…。」

なんかアホらしくてため息がでた。

「じゃあどーすんだよ!どーやって開けるんだよっ!このクソハゲ!」

「なんで俺に八つ当たりすんだよ!!意味わかんねーよ!」

「うるせーっ!変態エログロツルツピヤ!」

ガラガラガラッ!

岩が横にスライド。

「あ…、なんか、開いちゃいましたよ♪」

日蔭氏は笑う。

「なるほど、合言葉は、『変態エログロツルツピヤ』か。」

「変態エログロは全っ然関係ねーよっっ!……!」

クソっ、ツツコんじまった!

「ま、結果オーライ♪進め〜っ！相原探検隊っ♪」
全くもって脳天気！
即ち単純馬鹿っ！！！！

本当、エセ北斗神拳振りかざして骨の数本バツキり折れる。
そしたら多分こつゆうドラクエ的なテロップが出ると思うぞ。

ちんぱんは ちのうレベルが 0 / 0 1 あがった。 おしとや
かさが

0 / 0 0 1 あがった。

つてな感じでな……。

第19話・話が急展開過ぎてかなりテンパる俺の頭！！（誰だっ！俺の頭をじっ

若干ムカつく呪文（？）でスライドした岩の奥へと進むと、幅は人一人分くらいの狭い石造りの急勾配の階段（下り）が。

その壁はやはりヒカリ苔がびっしり生えててうつすら明るい。その階段を下りたら、なんかだだっ広い空間へ出た。

「おほっ！なんか罨とかありそうだなあ」ほら、天井から何か落ちてきて串刺しになるとか、振り子式に鉄球がドォーンとか」雄叫ぶチンパン。

「お前、本当不吉な事並べすぎ」。

もう条件反射ですでに俺の警戒レベルはすでにマックスだ…。

「…何だか、遺跡みたいな感じですね」。

日陰氏は薄暗い空間をぐるりと見渡す。

その時、

「…まさかここまでたどり着いちゃうなんてね」。
空間の奥から響く声。

「「セシル！！」」

俺達は声を揃えてその名を呼ぶ。

「無事でよかった」！

日陰氏はセシルに駆け寄ろうとするが、
「ちよいストップ、ひかっち。」

相原は語気を強めて日陰氏の足を止めた。

「何か様子がおかしいぞ……。」

相原は唇の片端を上げて鼻を鳴らして呟く。

「セ、セシル？」

不安げに名前を呼ぶ日陰氏に、

「……見つけたんだよ。」

セシルの発した声は、普段のセシルとは全くの別人のように感じた。

普段から冷静でどこか冷たい雰囲気を纏っているけど、今距離を置き目の前に佇むセシルは、冷ただけじゃなくて何だか危険な空気……即ち殺気に似た何かを含んでいるような気がした……。

「み、見つけたって何をだよ……？」

俺の問い掛けにセシルは、

「……復讐の為の鍵。」

そう言つと、セシルは高笑いを響かせた。

「復讐つて、誰に？」

相原は睨みを効かせて腕を組み、セシルに問い掛ける。

「もちろんナヤパサ。」

セシルは楽しげに笑う。

「どういう事だよ！」

叫ぶ俺に、

「パパとママが死んだのは、ナヤパサのせいだ……。私がこの島に閉じ込められたのも、みんな……。ナヤパサのせいだったんだよ。」
セシルは低く、くぐもった声でつぶやいた。

「セシル…」

日陰さんは胸の前にギュツと右拳を握り、唇を噛み締めた。

「親がナヤパサを守る為に戦争で死んだってのは嘘だったのかよ！

！」

「嘘じゃないよ……まあ、ナヤパサが無くなって悲しいってゆうのは大嘘だけど…」

…ねえテルアキ、本当は知ってたんでしょ？私が《アル・パサ》の末裔だって事。」

セシルは口元だけで小さく笑い、日陰さんを睨みすえた。

「……………」

俯き言葉を無くす日陰さんに相原は、

「…アルパサって、それ何なのさ。」

かん高い声が空間に反響し響く。

「…《アル・パサ》とは、『神に廃除されし者』つまり、私はナヤパサにとって害悪となる存在。…ね、そうでしょ？テルアキ。」

セシルは平静を装うが、発する言葉の端々からは憎悪の冷たい空気を感ずる。

「私達一族は、昔からトリスタ国民から忌み嫌われて迫害されていた。その理由は、私達一族がルギャツサを呼び寄せる悪しき力があるとされていたから。」

「……………」

何も言わずに俯く日陰さんにセシルは話を続ける。

「ツルンゲピアとの戦争だって、兵士としてこの島に送りこまれたのは、《アル・パサ》と忌み嫌われる私達一族数十人だけ。私達一族の大半が死に絶え、戦争の形勢がツルンゲピアに傾くと、トリスタ人はこの地下にある坑道から、この国では見た事もない異国の大量の兵器をこの島に持ち込み、ツルンゲピアに猛攻を仕掛けて、あれよと言う間に国を滅ぼした。そして、あつという間に引き上げた。怖くて山の中に隠れていた私に気付かずに。」

「そんな武力があるなら、なんで始めから使わずに…？」
俺はセシルに問い掛ける。

「《アル・パサ》の一族を根絶やしにする為。むやみに虐殺すれば、平和の地トリスタの神の法典モサリ・パサの意志に背く事になるから。けれど神の為の戦争で犠牲になれば、一族が死に耐える事はなんの問題もなく済む話。」

セシルは、一冊のノートをこっちに投げ捨てた。

「…パパの日記だよそれに《アル・パサ》一族は本当は何をしていたか書いてある。」

一言つぶやく。

拾い上げて、それに目を通す日陰さんは、小さく震えていた。

「日陰さん……。」

つぶやく俺に、

「《アル・パサ》の話はトリスタに来て、すぐに聞きました。もうすでに滅んだ一族として…。」

うなだれて首を振り、

「しかし、この島でセシルを見つけて、もしかしたらこの子とは…」

…

「だから、仲良しの振りをして私を見張ってたんでしょ？」

「……」

「日陰さん…、それ、本当ですか…？」

俺は日陰さんを見つめて答えを問う。

「…私も信じたくなかったんですよ。人がルギヤツサを呼び寄せるなんて。しかし、現実…セシルはルギヤツサと共にあの洞窟にいた。セシルはあれがルギヤツサだと知っての事だと思っていましたので……。」

つぶやく日陰さんに、

「うん。もちろんルギヤツサの幼虫だって知ってたよ。」

セシルはなんの悪びれもなく言い放つ。

「だって、この島は元からルギヤツサがタマゴを産む島だから。パ
パの日記にそう書いてあったでしょ？」

小さく笑い、ため息混じりに鼻を鳴らした。

「それから、ナヤパサの花から出る香りがルギヤツサのメスを刺激
して産卵の為の交尾を求めてナヤパサ畑に飛来する事……その周
期が十五年に一度つて事を《アル・パサ》一族は、国に内密にこの
島へと足を運び、ルギヤツサを調査して突き止めたとも日記に書い
てあるでしょ？」

睨みを効かせて言い放つセシル。

「日陰さん……、そんな事マジで書いてあるの？」

俺は日陰さんを凝視して反応を伺う。

「……ええ……。そう書き記されています……。」

苦渋の顔で呻くように日陰さんは地面に向かいつぶやいた。

「じゃあ！《アル・パサ》一族は無実の罪をずっとかぶって迫害さ
れてきたって事じゃん！」

相原の怒声が響く。

「迫害を受けてもパパ達は、トリスタを、ナヤパサを守る為に、ル
ギヤツサの襲来の年を、トリスタ人にそれを伝えた……。」

でも誰も一族には耳を貸さずに襲来の前の年に一族を戦地に追いや
り……そして滅ぼした。

戦争が終わった次の年に予知通り、この島からルギヤツサのつがい
がナヤパサ畑へと飛びたった。」

セシルの声に怒気がこもる。

「十五年前のナヤパサ災害は、トリスタ人達が全部自分達でまいた
ものなんだよ。はっ、ザマアみるだ！そう思つてこの15年この島
で生きながらえてきた。」

ナヤパサを失ったトリスタ人がどんな顔して、どんな生活をしてるかどうしても知りたくて、この坑道を探してた。そして、とうとう見つけたんだよ、この場所を。」

セシルは楽しそうに笑った。

「でも……テルアキがナヤパサを助けちゃったんだよね……」

状況は何も変わらずにトリスタ人は今も平和に暮らしてる……。私達の事を悪しき過去のモノ（産物）として簡単に片付けて……。」

瞬時に冷たい無表情になると、

「……だからね、私こう考えたの。どうせ《アル・パサ》として嫌われてずっと一人ぼっちでこんな島で生き続けなきゃいけないなら……」

……」

セシルはひと呼吸置いて、

「《アル・パサ》の最後の生き残りとして、私は一族を滅ぼしたナヤパサを根絶やしにしてやる……。そう決めたの！」

セシルはそう叫ぶと、自らの右手を見つめてそれを俺達にかざした。

かざした右手には、小さな麻のような布袋だった。

「何なのさ、それ？」

顔色を変える事なく相原はサラッと尋ねる。

「この島で生まれ育ったルギヤツサ三匹分とタマゴの親の《麟紛》だよ。この島に来てから、タマゴを産んで死んだルギヤツサのツガイと、三匹羽化したルギヤツサを私が殺したの。」

「何だと！？」

こんな10才位の小さなガキみたいな奴が、ルギヤツサを三匹も退治した！？

「ルギヤツサは成虫になるとね、とても弱いんだよ。頑丈なのは羽化する前の蛹の時だけ。」

再度小さく笑い、

「もしも仮に異国の兵器がナヤパサ畑に配備されてたなら、ルギヤツサは畑にたどり着く前に簡単に殺されちゃう…」

セシルは袋を愛おしむように見つめて、

「だから、私はルギヤツサを殺して、羽から鱗紛をかき集めた。」

「…確実にナヤパサを滅ぼす為に全部で五匹分の鱗紛をね。」

加えてセシルはこう告げた。

「最後の一匹はカザネが吹き飛ばしちゃったから、もうこの島のルギヤツサは一匹もいなくなっちゃった。」

「だからね、この鱗紛が最初で最後の私の切り札なんだ。そしてこの先の坑道が最後の鍵。」

ふふつと笑んだ。

「よっしゃ！セシル！その復讐っ、私も手伝うからっ！！」

なんの前触れもなく気合いの入った相原の叫びが響く。

「はあああああ！！??」

これはもちろん俺の叫び。

「か、かざねちゃんっ！何をいきなりっ！！！！」

さすがの日陰さんもびっくり仰天で相原に向かい声を荒げた。

第20話・結局さ、なんだかんだ言っても…、こつゆづ流れになるんだよなあ…

「私はセシルの復讐を手伝うよ。はい、私は今から《アル・パサ》と同盟を組む人間となりました。で、ナヤパサ畑をぶつ潰して、トリスタ人に、月に代わってきつっ！いいお仕置きしてやる！」

相原はあっは」と笑う。

「お前はっ！自分が何言ってんのかマジでわかってんのかっ！？」
俺はもちろんその危険な行為を止める側の人間ですよ！

「ナヤパサが無くなったら、トリスタ共和国は？俺達の仕事にだって恐るべき大ダメージを与える事に…」

「いちいちうるせーんだよっ！このバカッパゲ！仕事だあ…？はんっ、そんなモン知るかだよっ！っ！か、中野のクソジジイにはナヤパサなんてそんなモンなかったっじゃねーか！って逆切れしときゃーいいんだよ！どうせこの国の詳しい事把握できてないんだからよ！」

相原は鼻を鳴らして言い放った。

「トリスタ人だって、別に花が無くなっただけで死ぬ訳じゃねーし。」

あんただってぶっちゃけそう思っただけじゃん？」

「そ、そりゃあ花くらいで死ぬ訳ないとは思ってるけどよーっ！！」

俺は日陰さんに視線をやる。

「……………」

日陰さんは黙って下を向いている。

「大体さ！人の生きる権利より、花のほうが大切だなんて、そんなのデッカイ間違いじゃねーか！そもそも、神から祝福された、国が、国民が平和で幸せに生きる為の象徴なんだろ？ナヤパサってのはさあ！」

相原は日陰さんに問い掛けるように語る。

「なのに！なんであの花のお陰で苦しい思いしてる人間がいるんだよ！」

こんな世界地図にも載らないクソミニマムな島国の、日本のいち県民人口より少ないしょっぱい総人口しかないくせによおっ！！」
怒鳴り叫ぶ相原に、

「…確かに間違いかも知れませんが…。」

日陰さんは首を横に振り、嘆息してつぶやいた。

「…でもね、かざねちゃん、私はむやみに花の命を奪う事には同意できませんよ。」

だって…私は、植物を心から愛していますから！」

日陰さんは、相原に向き合つと、強い瞳を向けて小さく体を構えた。

マジか！日陰さん！

チンパンと肉弾戦おっぱじめる気かよっ！！

「ひかつち、ナヤパサへの愛と、佐々木に対する愛と、一体どっちが大切なんだよ…。」

「は？？え？？」

俺は思わず相原を見つめて声を上げた。

「佐々木は、絶対にセシルの味方だよ！」

え？…何？何？どーゆー事それ？

いや…俺、ナヤパサ畑襲撃反対派だ…よ…？

「佐々木はヘタレで愚痴ばかりのネガティブ弱々男だけど、小動物とちびっこにだけは激甘な人間だ！

きっとセシルの辛〜い気持ちを自分の事のように感じて何とかしてやりたいと思ってるよ！

なあ〜、佐々木い……………そうだよな？」

相原の殺気を纏った鋭い眼光……

『私に逆らうなら迷わず殺す……』

奴の目は間違いなく俺にそう言っている……。

「そ、そりゃあ、セシルの…《アル・パサ》がされた事は、人として……納得はいかねーけど……」

「ほ〜らね、佐々木だってセシルの味方だってさ。」

相原は俺と肩を組み笑う。

…なんで？いつの間に俺はコイツに抱き込まれちゃってるんだ…？

「セシルに協力すれば、佐々木はひかつちに心を許し、うふ〜んな事あは〜んな事♪そして、ナヤカラウトパタ〜な事もしちゃったりなんかして〜♪♪」

「あ、あ、い…は…らっぐ、ぐる…ふう…っ！」

俺は青ざめて、ガクブルしながら小さく相原の手をタップして名前を呼ぶ……。

「何だよ、佐々木〜、照れるなよお。」

愉快そうに笑うチンパン！

ち、違う…。肩組みながら首の頸動脈絞められて、今にも俺の意識が天に召されそうなんだ…よ？（やべえよ…意識が…と…び…そ…う）

「つか、なんで俺がこんな目に合わなきゃいけないのか……ぶっちゃけ意味がわかりま……せ……んよ。」

「ノッ、ノッ、ノブヨシさんと……ナ……ヤカラ……タ……」
「あーあ、オッサンが悶えながら危険な妄想を始めちゃったよ……。
つかさあ……、

「あなたは植物を愛してんじゃねーのか？」

「そんな俺の心の叫びも虚しく枯れ枝っぽくも悶えまくるオッサンは、

「むふふ……んっ……」

「よしっ、愛する人に身も心も捧げる覚悟ができましたっ！！
バッチこゝいですっ！！」

「かざねちゃん！私もセシルの味方として全力で協力します！」

「あっさりと植物への愛を捨てやがったな……！！」

「つか！セシルの為ってそれウソだろ！」

「テメーの欲望に完敗しただけだろ！ゴラァア！！」

「そう思った瞬間、俺の頸動脈は相原から開放されて、

「「そうゆう事で、決まりだよセシル。私達はあるに協力するから。」
「」

「にっかりと楽しげに笑う相原。」

「セシルはこの忌ま忌ましいやり取りを黙って観察していたが、
「……本当におかしい連中だな。」

カザネ…、でもお前の言葉は何故だか信用できるよ。」

セシルは冷たい眼差しに小さく光りを宿し笑みを浮かべた。

「おっほっほ♪私は自分が気にいらぬ事に喧嘩売るのが大好きなだけさ♪ぶっ壊し、デンジャラスバンザイじゃっ♪」

チンパンは公家のようにまったりと笑った。

本当にこの女はよお……………。

「俺達、この国のテロリストになっちまうんだな…。」

悲しみを通り越して、呆れてため息笑いが出た俺。

「いいじゃん、あんたは元からエログロテロリストなんだから。」

「エロテロリストはオメーだろ…!」

間髪入れずにチンパンにツッコむと、

「あはははっ♪そんだけツッコむ元氣があるならまだまだイケるな♪」

どこまでも陽気なチンパン相原……つかこいつの辞書にはきつと、『ネガティブ』って言葉はないんだろうな…。

ある意味羨ましーぜ。

そのぶっ壊れた性質^{タチ}

「それじゃあ、行くか！」

いざ、ナヤパサ畑…!」

右拳を高らかにあげて、相原はセシルに向かい歩きだした。

「…ありがとう、カザネ……………」

セシルは照れ臭そうに小さくつぶやき笑った。

そんなセシルの頭をぽんと撫でて、

「な〜に、礼なんていいさ。私はセシルが好きだけさ。あんたは間違いないいい子だ♪」

小さなセシルの肩を抱き、意気揚々と歩く。

「ノブヨシさんっ♪ノブヨシさん♪ノッブヨッシさ〜んっっ♪むふっ♪うひっ♪いや〜んっ♪きゃふ〜んっっ♪」

俺の隣には妄想に踊るキャピキャピ狂ったオッサンが一匹……

多分、このオッサンの妄想の中で、俺は絵にも描けない恐るべき行為をオッサンに施しているんだろっとな……………。

妄想の中とは言え、可哀相過ぎるぜ、俺ってばよー…。

っーか…、ナヤパサ畑が滅んだら…俺の毛髪再生の夢は夢のままで終わりを告げるんだな…。

…がっかりな気持ちはあるさ……………。

でもなあ、なんだろうな？

がっかりよりも別にある、この不思議な高揚感は……………。

悔しいけど、今、俺は心の底ではちよっとワクワクしている。

これから待ち受けるであろう『破壊行為』に。

相原に感化されてるのか…。

それとも、元々備わってた感情なのか……………。

ぶっちゃけわかんねーけどな。

第21話・日陰さんと一緒にはやだやだやだやだ……と駄々をこねるの

広場からセシルの後ろに延びる、更に薄暗い通路を歩くと、また少し開けた場所にたどり着く。

ヒカリ苔がびっしり生える壁面には、小さなランタンが2ヶ所壁に掛けられている。

相原はライターでランタンに火を点し、眼前の光景に、

「うつわあゝゝっ」なになになになにつ！？」

あの素敵な乗り物はっ！」

瞬く間にハイテンション！

「うああああ……」

もちろん、俺は真逆に瞬く間に青ざめて、テンション急降下……

「すごいですねえ、ここに《こんなモノ》があっただなんて……」
日陰さんは驚きつつも、どこかワクワク感に満ちた顔ではにかんでいる。

「ここから、ナヤパサ畑までこれで繋がってるんだよ。」

セシルは淡々とそう述べる、

「実際私も初めて乗るから、果たして道がどうなっているかは謎だけれど」

……恐すぎるだろ？それ……………。

「道なき道をつき進む！これぞまさしく『生』を感じるスリルってもんよのうっ」

さすがはデンジャラスな馬鹿。食いつきが半端ねーな…。

俺の真横でキャキャツと弾むデンジャラスチンパンジー相原風音
(アラサーの独身女)

うん、あれだ、あれ。

多分相原にはこの目の前の光景が、ジェットコースター程度の楽しいアトラクションとして写っているんだろうな。

ちなみに俺はもちろん絶叫マシンは大嫌いだ。何故なら、あのワケのわかんねー重力に当然耐えられずに、胃の中のモノをリバーズ――即ちゲロっちまいそうになるからだよ！！

俺の少し離れた目の前には、暗闇に延びて見える、古臭い茶錆びた線路らしきモノと、見た目「壊れます！」と主張しているように感じる、木製のオンボロ貨車が…。

はいはい、もう最悪ですよ。

手摺りナシ！安全ベルトナシ！ブレーキも当たり前のようにナシ！ただ木の箱に車輛がついてるだけ！（無駄に二両編成だし）

殺す気満々だろ？と天の誰かさんに尋ねたら、サラッと「イエス」
と笑っただろうな…。

何だろ、この煮え切らないモヤツと感は…。

「さてと、じゃあ私とセシルは前に…」

「ちよっーと待ったあああっ！！」

俺は相原の肩を掴み、もちろんそれを断固として阻止しますよ！
ええ！

「何だよ…、」

面倒くせーな…と言いた気な相原の視線に負けてたまるかちきしよーっ！と、

「俺はセシルと乗りたい！！」

「（乙女狂い咲きのオッサン）日・陰・氏・の・隣・は・い・や・だ！」と目力^{めじから}で訴えた。

「…あんたのエロの守備範囲にはぶつちやけ感嘆したくなるよ…」

相原は「もう、あんた最強だわ（笑）」とでも言いたそうな笑みを浮かべて、俺の肩をぼんぼんと叩き、

「乙女系男子には飽きたらず、（見た目）ロリった少女系にまで欲情して、変態街道まっしぐらっ」

鼻唄混じりでほくそ笑むチンパン…？お前マジで頭イカレてんだな？

「私は男狂いのツルツピヤと密着するのは死んでも嫌だよ。」

はい、でた。

言葉の『矢（属性氷）』で何の躊躇いもなく心臓ひと突きの攻撃！！

このクソガキは、人を見た目で差別してはいけないと言う言葉をマジで知らないんだな……。

しかも男狂いって大変不名誉な称号まで与えられたし……………。

いや！そんな事でめげてられないぜ！！

「じゃあ、相原の隣で…」

「そりゃあ無理だね。私とひかつちの友情にヒビが入る行為は却下、却下、却々っ下下！」

相原はしっしと手を払い、さっさと後ろに乗りやがれと笑う。

ああ、後ろには頬を上気させて、ソワソワもじもじと落ち着きのない乙女系枯れ枝男子（モチロンオッサンな！）《日陰さんと一緒》と言う名の拷問ルーム！！

俺はきつと、間違いなく色んな意味で悲鳴を上げるだろう……。

「じゃあ、出発するぞ。」

セシルはトロツコの左横にあるゲートを開閉するレバーをカシャンと倒し、ゲートを開けて素早く相席の隣に乗り込む。

トロツコ列車は下り線路を走る、走る、走つ……

「いやあああああああああーっ！」

なんでいきなりハードな急降下つ……

「イエーイー……！真っ暗で何にも見えないっ！スリル満点！最高おおっ……！」

「あはははっ、凄いスピードだっ、線路、切れてたら間違いなくアウトだな。」

咆哮しちゃってる前の二匹……！

バカじゃねーっ……！

「あゝん、ノブヨシさああゝん。」

「ぎいやあああああああああいいやああーっ……！……！」

オンボロトロツコの車輪が悲鳴をあげる！

ガタガタと揺れ跳ねる木の箱……！即ち車体……！

暗闇の中、右へ左へと不快指数たつぷりの重力に揺さぶられ、振り落とされそうになりながら……

隣のオッサンが！俺にぎゅっと絡み付きやがり……

「ノブヨシすわあ〜んっ」

「いゝやあああああああつっ！！！！！」

ぐあああああああああああー！！」

ああ、見たぜ…地獄の三丁目。

色んな意味で逝っちまいそうだよ。

「ヤッホーっ！光だっ！！ゴールだぞっ！」

叫ぶ相原の声に、息絶え絶えの俺は思った。

（もう滝壺とかはヤメテクダサイ）
と。

第22話・たどり着いた場所。神の祝福の絨毯へじゅうたん《そして……

(うーん……)

ぼんやりと霞む頭でゆつくりとこの状況を考える。 辺り一面ふつかふかだ。

鼻や頬をやりわりとくすぐる草らしき感触や、土の匂いを感じて、そーっと目を開けてみる。

葉っぱの濃い緑色と、土の茶色……………
ゆつくりと身体を起こすと……………

まるで、雲の上に寝そべっているみたいに一面真っ白だった。

「はは、ここはマジで天国か……？」

考えなしにそうつぶやいてしまふ、伸びやかで雄大なこの景色に包まれて、俺は思う。

『とうとうたどり着いたんだ』と。

仰向けになり、雲一つない真っ青な空をぼんやりと眺める。南国特有の潮風が白い雲のような花の絨毯をそよそよと揺らし、首元や耳がこそばゆいけど、なんか気持ちがいいな。

できれば、こうしてずっと動かずに流れる時間に身を任せたい。

夕暮れのオレンジが混ざる空に、この花の絨毯はどんな色どりを醸し出してくれるんだろう？

満天の星が瞬く夜空に、この花の絨毯はどんな輝きを見せてくれるんだろう？

答えは…

きつと見つからない。

だって、俺達は……

この神様の花の絨毯《ナヤパサ畑》を

滅ぼすんだから……。

「……………」

やるせない気持ちさがこみあげる。

花の犠牲になったセシルの仲間達や両親を考えると、こんな花、無くなってしまうばいって憎む気持ちはわかる。俺だって、理不尽な理由で迫害を受ければきつとセシルと同じ気持ちになるだろう。

でも、こう思わずにはいられないんだ……。

『何も知らずに一生懸命生きて咲いてる花に、罪なんてない』と。

はつと我に返り、身を起こしてみんなの無事を確認する。

相原は、俺から少し離れた場所で言葉を発することなく、眩しそうに目を細め、憂いの笑みを浮かべて真っ白な絨毯を見つめていた。相原は、この景色をどう感じているんだろう？

やつぱり、滅ぼすべきだと思ってるんだろうか？

俺はやつぱり嫌だと思った。

別に俺の髪の毛はこのままでもいいから。

そんな事はどうでもいいから、それでもこの『神様の花の絨毯』を滅ぼしたくない。

決心して立ち上がりかけたら、後ろに日陰さんがいた。相変わら

ずはに candeyagar.

でも、その顔は穏やかで、何だろう、若干神々しい感じすらして
る。

「ノブヨシさん…」

「日陰さん、俺、やつはこの花畑を滅ぼすなんてダメだと思う」
日陰さんに視線を向けて、そう訴えた。

日陰さんはにこやかに笑って、

「ようこそ、我が国の聖地、ナヤパサガーデンへ」
そして、お疲れ様でした~~~~~っ ♪♪」
俺に拍手を送った。

「はい???」

え………?

何、何? お疲れ様でしたって……???
俺は相原を見た。

さすがの相原も状況が飲み込めずに戸惑っている。
「ナヤパサを滅ぼすなんて嘘だよ~~~~~っ ♪♪」

セシルがキャッキヤと笑って手を叩く。

ナヤパサ畑の横の、白い石造りの建物から、ぞろぞろと人、人、
人がぞろぞろと………

「ナヤパサガーデンへようこそ~~~~~っ ♪♪」
沸き上がる拍手の中で、俺と相原は声を揃えて

「「どーなつてんだ」
と、顔を見合せた。」

「全く！マジで信じらんねーよっつ！！！！！」

賑やかな宴の席で、俺はトリスタの地酒を片手に悪態をつきまくる。

「まあまあ、落ち着けハゲりんこ」

隣でキャツキヤと笑い、ご機嫌で酒を煽り俺の肩を叩く

「これがっ、この結末にどう心を落ち着けろっっていうんだよ！くそチンパンっ！！！！！」

あ、しまった！思わずチンパン言っちゃっ——

バキョツツ——！！！！

「ガバツツ——！！！！！」

俺の左頬にチンパンの拳がめり込む。ひよここと星が頭の上とか生易しい衝撃じゃねーぞ、こりゃ。

「こんなに色香漂うナイスな女子にチンパンだなんて。次にそんな暴言吐いたら命はないと思えよ、へなちよこ・うすらハゲ。」

オメーの暴言と暴力はオツケーなのかよっ！！！！！

という目を向けてやったら、

「あゝん？文句があるならかかってこいやああ」

なんつー、柄の悪さ…

どこがナイスな女子なんだ（色香は…認めとく）

頬をさすり、酒を胃に流し込む。こうなりやもう呑みまくるつきやないだろ。

「しかし、この数日のサバイバルアドベンチャーがまさか、『歓迎ツアー』だったなんて……」

俺はあの島での日々を思い出し、深くため息を落とした。

「なんとも粹なはからいよう♪まったくもってお茶目だねえ♪
トリスタ国民は♪」

相原は満足感いっぱいであつは♪と笑う。

いやいや、お茶目とかそんな生易しい表現おかしいだろ…

「ノブヨシさん…、かざねちゃん、沢山食べてますか？」

日陰さんとセシルが俺達の前に座り、笑顔を向ける。

「もおっ！酒も料理も最高だよ♪このままトリスタに永住したいくらいだ♪」

ご機嫌に笑う相原に、

「カザネがこの国にずっといてくれたら、私とってもウレシイよ♪」
セシルは身を乗りだして笑顔を輝かせた。

まったく、すげえガキだよ、セシルってやつは…

実はセシルは12歳。

トリスタ国立歌劇団の実力ナンバーワン役者。

子供店長も真っ青な演技力で、見事に俺とチンパンをハメてくれやがった。

ルギヤツサはホントにいるんだけど、ナヤパサを枯らす害虫ではなくて、ただのどっかい蛾^がだったし。セシルの持ってた袋の中身

は『デンプン』——即ち片栗粉だった。

しかも、こともあろうか日陰輝明の娘ときたもんだ！

その日陰輝明は、日本人でナヤパサ栽培の統括責任者つてのはホントなんだけど、トリスタ国立歌劇団の団長でもあるって……

娯楽の乏しいトリスタでは、日陰親子はかなりの有名人——いわゆるスター的な存在なんだと。

日陰さん曰く、

「昔から宝塚歌劇団に憧れていて」とのこと。

もーほー（いや、子供がいるってことは、バイか？）

どっちにせよ、乙女疑惑は俺の中では晴れてない。それを証拠に……

「あのですね、もうツアーは終わったんだからさ……」

俺に寄り添いクネクネとはにかむのはヤメロ、オッサン！！

「パパあ、ママになるなら、ノブヨシよりも、カザネがいいよおっ！」

無邪気な笑みでおかしな事を言うこのガキ（セシル）は紛れもなく奴の娘だなあ、と妙に納得だよこんちきしょー。

「しかし、マキユポとか手榴弾とか仕掛けやら、手が込みすぎだろ！」

「マキユポはこの国で飼育されてる畜産物を一匹放したんです。ホントはあの島は昔鉱山で、動物はほとんどいないんですよ。手榴弾は火薬調整してあるので、さほど威力はありません。ルギヤツサの蛹も土に埋もれただけで元気でしょう」にこやかに酒を呑む日陰さん、いい加減俺から離れるよ……！！

「あ、ちなみにあの干からびた『ち××』は、泥をこねてつくりました」

ほんつとやる事こまけーよなつつ！！！！！

「でも、嬉しかったあ……」 日陰さんは、感嘆して目を閉じる。

「作り話とは言え、ノブヨシさんがナヤパサを滅ぼすのは間違ってるといっけてくれて」

そうつぶやき開けた目には、うつすらと光るものがたまっていた。

「ホント、綺麗なガーデンですよ……。足元真っ白まるで、雲にのってるかと錯覚しちゃったし……」

俺は小さく笑って、ちびりと酒を呑む。

「ええ。ナヤパサはこの国にしかない、特別な、大切な花ですから」
日陰さんの言葉に、俺は小さく頷いた。

「それで……えっと、日陰さん……ナヤパサエキスで死滅した毛根はどれくらいの時間で復活できるんでしょうかね？」

「トリスタに代々伝わる秘伝レシピで調合した薬なら、一ヶ月でふっさふさですよ」

「い、一ヶ月で？ たった一ヶ月ですか？」

「はい」

「そのレシピ是非とも教えて！」

「レシピは国家気密です。知りたければ、この国の住民になる以外は無理ですね。あ、ちなみにこの国は男性同士の結婚も認められていますので、私とノブヨシさんとの間に法律の障害はありません——」

「それは勘弁して下さい！ 俺にはナミエと言う大事なオンナがいま

すから！」

断固として言い切る俺に、日陰さんはやれやれと笑ってくいっと酒を呑んだ。あゝあ、これ以上何を聞いてもきつと無駄だろうな……

まあいいか、とりあえずナヤパサさえあれば、新薬『アンビシヤスZ』を作れるから。その効果を期待しよう。

全くもって骨折り損じゃない。いずれは俺の頭皮も毛髪がふさふさとゆれる日がくるだろう。いや、できなきゃ中野博士の頭を剃髪——即ちツルツパゲに剃りあげて、後頭部に油性マジックでバカ顔書いて研究室の窓から、てるてる坊主みたいに吊してやる。

それに値するくらい今回、あの島での日々はハードだったんだからな！

ナミエにどうやって話そうか？

あんなミラクルな体験、話しても本当に信じてくれるだろうか……？

あ、相原とのこと……

あれは、夢だった。うん。そうゆうことにしよう。

……なんか、改めて考えると、どさくさに紛れてすげえことしちまったような……

（回想……）

相原をチラッと見た。

「なんだよ、わかハゲ、また頭ん中でエロチックワールドを展開してるのか？オカズは誰だ？」

「！！！！ちっ、ちげーよっ！ふざけんな！」

いかん、呑みすぎだぞ、俺！！

「ちよつと呑みすぎた！外で風に当たってくる！」

何か異様に相原をオンナと意識してしまった……
これは呑みすぎ以外の何者でもない！

俺は立ち上がり、宴の席から外へと出た。

最終話・グッバイまたね♪

（相原を意識しちまうなんて、俺ってば相当飲みすぎだよ！マジ勘弁してくれよなっ！）

賑やかな宴の場から、外に出て少し酔いを覚ます為に夜風を浴びながら歩く。

澄んだ夜空には数多の星が瞬あまたいている。時折流れ落ちて消える星を見て何故だろう、ちよっとだけ胸に切なさが入み上げてくる。祭りの後のあの寂しさにもちよっと似てるかな…。

目の前に広がる、闇を淡く青白く輝かす《神の祝福》という名の花の絨毯。夜風にサワサワと一斉にその身を揺らす。

それは、懸命に生きる命の歌声にも感じる。

「本当に綺麗だなあ…」

感嘆してつぶやいた俺の声は揺れる花の歌声に吸い込まれるように地面に消える。なんだかすげーよな…。こうして見ているだけで自然と視界が霞みがかかるよう——即ち泣きなくなっちゃって事。

再度感嘆すると、

「な〜に浸っちゃてんだよ、そんなにひかつちとの別れがツライのか？」

後ろから相原が俺に歩み寄り、やれやれと笑いかける。

「別に浸っちゃいねーよ…ただ、綺麗な花だなあって、そう思っただけだ」

そっぴいっつ鼻すすってる俺の顔からは小さく笑みがこぼれてる。

「なあ…相原…」

「なんだ…？いきなり改まった顔して…。」

「あの…、その…滝壺におちた後、島の川岸でしたこと……。」

俺は言葉を探しながら相原に、あの時の事は本当にアバンチュールって事で片付けていいのだろうか？と問いかけたかったんだけど、「大丈夫だつて、別にそれをネタにユスるつもりも、ユアハニー・ナミエに告げ口するつもりもないから」

相原はあつは」と笑って俺の左肩をぽんぽんと叩いた。

「いや、そうゆう訳じゃなくてよ…。」

「まあ、いいじゃないか、細かいコトは。お互いあの時はなりふり構わず性欲を満たしたかった。すなわち、人間特有の自然の摂理って事でいいじゃん」

「自然の摂理って…。」

「オーバーじゃねえか？と苦笑いを浮かべる俺に、

「セックスすんのに綺麗ゴトを並べるのはナンセンスだぞ。だってさ、人間だけじゃん、交尾すんのは子孫繁栄の為だけじゃないって種族はさ」

相原は笑ってこう続ける。

「それってさ、人間が与えられた特別な愛情表現じゃないかと思ってる。そりゃあ、セックスに対して間違った認識はクソだと思っよ。快樂だけに溺れて人間が腐ってくなんて馬鹿馬鹿しいし。

自分じゃない人の温もりを感じてさ、ああ、生きてるんだなあって、ああ、ひとりぼっちじゃないんだなあって感じられる事って大事だと思うぞ。まあ、それは男と女ではやっぱり感じ取り方は違うとは思っけどな。あははっ、そう考えたら、人間てなんて弱っちい生き物なんだろうな…。」

相原の笑顔は、どことなく寂しそうに見えたのは俺の気のせいだろうか……

「ま、完全無欠、才色兼備のミラクルレディーでも、どうしようも

なく人肌を欲する時もあるってコトだ」

「どんだけ自分の事褒め称えてんだよ…」

やれやれと笑う俺に、

「そーゆーことは、何かしらひとつでも私より秀でた事を身につけてから言いやがれっ」

相原はあっぱと笑って俺の尻を蹴りやがった。

悔しいけど、やる事めちゃくちゃだけど、実は相原はスゲー大人なんだなあ…と思ってしまった。

ちゃんと自分を理解して、自分を楽しめる大人。時々ガキ臭い事をしつつも、意外と物事を冷静に見てる。そして自分の弱さもちゃんと知ってるし、それを人に押し付ける事なく受け止めてる。

俺にはない『包容力』

俺は、誰かに求めるばかりで、何でも人のせいにして、頼りっぱなしだ。

帰ったら、たまにはナミエの為にご飯でも作ってみようかな…。

洗濯物でも一緒にたたんでみようかな。

なんとなく、そんな気持ちになった。

今回のこの仕組まれたサバイバル生活で得たものは、きっと俺を変えたと思う。大きな変化じゃないけど、確実に何かが変わった。

再度ナヤパサの絨毯を見つめて淡い輝きに目を細める。

「ありがとう、ここに來れて本当によかった」

自然に言葉が出た。

相原は、何も言わず黙って笑ってた。

トリスタ共和国際空港の前には、別れを惜しむ人ばかり。

「カザネ、絶対にまたトリスタに帰って来てねっっ」

セシルは相原にしがみつきうんうん泣いている。トリスタナンバーワンの役者だけど、やっぱりまだ純粋な12歳。ちきしょー、子供の涙って、綺麗だよなあ……。

「ノブヨシはもう来なくていいよ」

前言撤回！こいつはやっぱりクソガキだよ！

「ノブヨシさん……ぐすっ、ノブヨシさあぁん！」

やめて！いくら心はピュアでも鼻水垂らしたオッサンに抱きすがられるのは精神的にキツ過ぎるっ！

ちよつと！どさくさ紛れでまだどこ触ってんだよ！

「私とのあの日々、絶対に忘れないで下さいね！」

精一杯はにかむ日陰氏を見て思う。

神様、デンジャラスな記憶を即刻デリートして下さい。

「サヨナラ、マタノオコシヲ。マタ、タノシイ、カンゲーイベント、カンガエトクカラー、クルトキレンラクダサリマセデゴザル」
本当、日本語へったくそな通訳のパタヤさんはニツカリと笑い手をヒラヒラと振る。

いやあ、デンジャラスなイベントはもうやめとこうか？あっはっは（怒）

「本当にありがとう！またね♪」

「お世話になりました」

俺達は、タラップを上りながら、笑顔で手を振った。

「あゝあ、また又ルイ日本に帰還しなきゃいけないなんて…退屈よのう…」

飛行機の中、欠伸混じりに相原はぼやく。

「だったらトリスタに永住すりゃいいだろ。」

「やれやれと思いつつ、俺は目を閉じる。」

「あゝっ！降ってこおい！デンジ——」

「ストーリー——ッブ！！！！」

その先は言つな！

俺は相原の危険な呪文を制止する。

「…全く、ヘタレなウスラハゲよのう…」

「何とでも言えればいいさ、アンビシヤスZさえできりゃあ、俺の頭はふっさふさになるんだからな！」

「失敗しろ、失敗しろ…」「不吉な念を送るんじゃねーよ！」

「…お前、なんか生意気になったなあ…。ナミエちゃんにばらしてやる。佐々木に襲われたって♪」

「あ、アホか！！…お前、昨日奮った熱弁を忘れたのか！！！」

「は？熱弁？なにそれ？酔っぱらって覚えねーや」「くぬぬぬう

…このクソチンパン！」

「お前、100回死刑決定」

「いや！今のは！！！」

「問答無用じゃ！」

「いやああああっ！マジスイマセン！……！」

飛行機の中、俺の悲鳴がこだました……

（おしまい）

最終話・グッバイまたね♪（後書き）

すぺしやるサンクス

・ハルと愉快的仲間たち

みんな野球頑張ってね♪

楽しい時間を本当にありがとう。

お読み戴いた皆様、心より御礼申し上げます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1639j/>

いきなりサバイバーっ！

2011年9月12日14時38分発行